

# おもちゃ絵画家・人魚洞文庫主人川崎巨泉（承前）

## 浮世絵師からおもちゃ絵画家への軌跡

森田 俊雄（元中之島図書館）

### 〔 2 〕 浮世絵師

#### 2 - 1 . 浮世絵師芳瀧への入門

明治、大正、昭和前期と活躍した巨泉の活動は3つの時代に分類できる。その第1期が浮世絵師時代である。以下第2期が図案家時代、第3期がおもちゃ絵画家時代である。無論各時代の活動は載然と区分できない。重なり合いながら変遷していった。

巨泉は何故浮世絵師芳瀧に入門したのか。幕末から明治初期に生を受けた絵の好きな子供の学習環境と言え、学校教育よりも生地の画家に入門、その後京都、大阪、東京の画家に就いて学んだ人が多い。例えば1878(明治11)年津山生まれの赤松麟作は、1894(明治27)年に来阪し洋画家山内愚僊に就いた。1870(明治3)年香川生まれの近藤翠石は9歳で藤田台石に学び、のち大阪の森琴石に入門している。大阪毎日新聞で活躍した坂田耕石は最初金沢師範の洋画家市村才吉郎に学び、東京の尾形月耕に入門した(74)。『左海人名録』(輻湊堂 嘉永4年刊)には画家として大西東雲(市ノ丁山ノ口)、岡田彦兵衛(名実、字永継、号九茄、住吉)、田能村小虎、森鷗泐(名正衡、少林寺丁大道)などの名が見えるが、13歳の巨泉の通学範囲には他に適当な先生が見つからず、京都から転居してきた有名浮世絵師中井芳瀧が甲斐町に住んでいたのもその門を叩いたのであろうか。

因みに堺の甲斐町は与謝野晶子が生まれた町である。当時は大阪府ではなく堺県の甲斐町であった。晶子は巨泉が生まれた翌年の1878(明治11)年に、菓子商駿河屋二代目鳳宗七の三女として生まれている。亡くなったのは巨泉没年の翌年1943(昭和18年)であった。晶子は生涯に5万首に及ぶ歌を詠んだという。巨泉が描いたおもちゃ絵は何体あったのか、誰もそれを確認したことはないだろう。数の上からは晶子の作歌の5万に及ぶべくもないが、1万体とは言わないまでも数千体に及ぶ貴重なおもちゃ絵を残したのである。絵が好きだった巨泉を思って親が芳瀧に面倒を見てくれるように頼んだのであろうか。南木芳太郎が主宰した雑誌『上方』に「中井芳瀧」や「中井芳瀧の片影」を書き残した巨泉だが入門の経緯については全く触れていない(75)。

## 2 - 2 . 巨泉の師父中井芳瀧

1942(昭和 17)年 6 月号の『郷土趣味上方』掲載の「中井芳瀧の片影」は巨泉が芳瀧の略歴と思い出を綴ったものである。下記は巨泉の記述に由良哲次著『総校浮世絵類考』(76)から補記した芳瀧の略歴とその周辺の事柄である。

中井芳瀧は、本名恒次郎、一養斎、一養亭、養水、寿栄堂、豊玉、里の家、阪田舎居などの別号を用いた。1841(天保 12)年 2 月 22 日、大阪南区鰻谷に父源兵衛の長男として生



まれました。明治 7、8 年ころ父の祖先にあたる笹木家の姓を継いだが、後に弟嘉造(画号芳光)に譲り元の中井姓に戻った。12 歳で江戸の歌川国芳に入門。1855(安政 2)年に独立。芝居看板絵、俳優似顔絵、新聞挿絵、摺物絵、その他風俗画などを描くが、晩年は絹本画を主とした。戯作、情歌、狂歌、冠附などを作る多趣味の人であった。情歌とは「よしこの」と読み幕末から明治に大阪で流行したよしこの節のことである。巨泉は雑誌『上方』(昭和 10 年 10 月号)に「ア

大阪錦画新聞(図 18)

サヒビールと情歌」を書いたが、これは芳瀧が 1892(明治 25)年にアサヒビールの朝日に波のラベルを描いた縁で、その頃情歌がはやっていたので平瀬露香、鳥居駒吉、宅徳平、北村柳也を撰者に旭、麦酒、吹田(筆者注：現在の大阪府吹田市の事)を題にして一般から情歌を募ったという話である。「昔むりやりこらえた苦味今は吹田の旭ビール」などの歌が紹介されている(77)。なお選者の平瀬露香は大阪を代表する趣味人・実業界の重鎮。“芦の丸屋”と号した情歌の名宗。鳥居駒吉、宅徳平は大阪麦酒会社(現アサヒビール)設立発起人であり、1889(明治 22)年有限会社大阪麦酒会社創立時の社長が鳥居駒吉、取締役が宅徳平である。北村柳也は実兄花月と共に浪花情歌界の権威といわれた人。柳也は 1856(安政 3)年の生まれらしいので、1892(明治 25)年当時はまだ 36 歳(78)。

芳瀧は 1880(明治 13)年京都に移住、1885(明治 18)年に堺に移り 1899(明治 32)年春病の床につき、同年 6 月 28 日甲斐町で病没した。享年 59 歳。法号は楽邦軒静芳居士、墓は南旅籠町の南宗寺にある。「浪花百景」は国員、芳雪、芳瀧の 3 人が描いたが、芳瀧は国員に続いて 31 景を描いた。さらに



は明治初期には錦絵新聞の画文作者として勸善懲悪新聞、

芳瀧筆の引札(図 19)

大阪錦画新聞などで活躍したが、錦絵新聞に笹木芳瀧の名前が見えるのは先の事情による

ことがわかる。なお芳瀧の実弟笹木嘉造(画号芳光)は巨泉の『芳瀧画集』によれば、1909(明治42)年42歳で没したという。暫定的ではあるが、笹木嘉造(画号芳光)の生没年は1867(慶応3)年～1909(明治42)年としておきたい。

### 2-3. 版画の制作

巨泉の浮世絵師時代を1890(明治23)年13歳で芳瀧に入門してから1901(明治34)年の約11年間としたい。後に紹介するが巨泉の図案が確認できた年代が1901(明治34)年であり、また大阪商品陳列所の記事(“3-2. 図案家時代”参照)が図案の創始を1903(明治36)年としていることから、1904(明治34)年あたりが浮世絵師と図案家の境目であろうと考えた。但し、“[6]雑誌『鯛車』の巨泉追悼号”で紹介するように巨泉の画弟子井上麗泉は、巨泉が装飾画に転じたのは大正改元の年であるとしている。

巨泉が浮世絵師時代のどれほどの作品を描いたのか全くわからない。中之島図書館が所蔵している巨泉の版画のうち1900(明治33)年発行の『大阪名所』は巨泉が全画を描いている。また1903(明治36)年発行の『大阪名所十六景』はその一部を巨泉が描いている。これ以外に筆者は巨泉の版画を確認できていない。1943(昭和18)年大阪府立図書館が作成した『川崎巨泉画伯遺墨 人魚洞文庫絵本展覧会目録』の巨泉略年譜でも巨泉をおもちゃ絵画家として紹介しているので、浮世絵師時代の作品などについては一切記載されていない。だが『大阪名所』は巨泉の浮世絵師時代の最末期の作品に違いなからう。この版画の出版が1900(明治33)年で師中井芳瀧が亡くなった1年後のことであることから、筆者はこの作品を巨泉の浮世絵師時代の生きた証と浮世絵時代を否定するアンビバランツな作品ではないかと考えている。



「住吉・反橋」(『大阪名所』)(図20)



「四天王寺正門」(『大阪名所十六景』)(図21)

明治30年代の大阪名所風景を描いた版画は、阪田耕雪の『美人見立京阪神名所図絵』(明治36年、全13景)、『大阪名所』春孝画、大室音吉編彫刻(明治33年、10景)などがある。『大阪名所』と『大阪名所十六景』、巨泉の作品を並べて眺めてみる。この2つの版画は

巨泉を知る手がかりとなるものを多く残しているように思える。例えば住吉の反橋である。この風景は明治以降名所絵葉書に取り上げられる有名な風景の一つである。この絵に巨泉は、美貌の婦人とその使用人らしき美形とはいえない女性を正面に配した。何故そのような人物を配するのか。四天王寺正門の版画には老爺老婆と首に荷物を巻く丁稚らしき人物を配した。しかも老人の顔の皺をしっかりと描いている。あるいは学帽を被った可愛い少年とちょっとゴンタそうな子ども。何故「大阪名所」の人物表現にことさらリアルさを持ち込むのか。名所風景なら人物はどうでも名所の景色を版画で美しく見せたらそれでよいではないか。だからここには何か新品の白靴をちょっと汚して履くような、清潔、綺麗さの生な状態を恥じる感覚といった、新品・清潔への羞恥的感覚を読み取ることが出来る。それが巨泉の韜晦趣味の表現なのである。

巨泉の2つの名所風景には師芳瀧たちが描いた『浪花百景』の叙情や情緒を感じることは到底できない。大阪名所の風景を感じさせてくれない、妙なリアルさに戸惑うのだ。

筆者は郷土玩具文化研究会の機関誌『郷玩文化』2006(平成18)年、通巻No.178号の「人魚洞文庫展示会と川崎巨泉」で巨泉の「大阪名所」について「近代化社会をポジティブに描いた社会的錦絵」と書いたのであるが、それよりもこの絵の中には巨泉の企みと作為が隠されているのではないか。つまり巨泉の韜晦趣味を解剖すれば、浮世絵世界に思いを残しながら、敢えて名所風景に奇妙なリアルさを持ち込み、ちぐはぐな世界を描くことで浮世絵世界を否定したということではないだろうか。自分はこのリアルさこそ求めている、浮世絵のような世界だけでは満足していない。そう言いたかったのではないか。1900(明治33)年、1903(明治36)年という出版年はあながち偶然ではないように思えるのである。



巨泉筆の引札・明治30年頃(図22)

巨泉が描いた大阪風景は、亡羊とした風景の広がり、賑やかな街路そして華やかな色彩にはしばしば目を奪われるが、どこかに空虚さも漂わせている。明治30年代の版画世界の色彩感覚に戸惑いながら見ることになる。

『大阪名所十六景』の版元である中井徳次郎について触れておく。中井は南区博労町で中井印刷所を経営していた。1896(明治29)年3月発行の『大阪市商工業者資産録』によれば、中井は1856(安政3)年9月生まれ、南区鰻谷に住んでいた。職業は彫刻・印刷とある(79)。少し時代は下がるが1913(大正2)年6月号の『大阪印刷界』は中井を訪ねてインタビュー

記事にしている。当時中井は団扇絵や引札で大阪の印刷界で知られた存在であった。そこで中井は木版印刷の需要は減退せず、逆に需要は増えていくと予測し将来もその可能性を信じていた印刷人であった(80)。

### 〔3〕版画への道程

#### 3-1. 写生の人

まだ春風駘蕩たる雰囲気を残す明治の堺で芳瀧に入門し、浮世絵師としての修行を始めた巨泉の最初の仕事は1894(明治27)年18歳のころポチ袋(祝儀袋)の画を描いたことである。入門から既に6年。浮世絵師の修行の過程で言う“敷き写し”から“玩弄画(おもちゃ絵)”を終え、師匠の版下を描くようになっていたかもしれない。1843(昭和18)年当館が作成した人魚洞展覧会目録の略年譜に掲載されたところを見ると、これを描いて初めて収入を得たのだろう。

1899(明治32)年1月10日発行の『商業資料』の新年挨拶欄に巨泉が名前と住所を載せている。『商業資料』は、大阪経済社社長永江為政(幼名:多喜馬)が1893(明治26)年に創刊した大阪の社会経済を論じた雑誌である。まだ22歳でありながら一人前に名前を出しているのは、この時すでに独立し画業を営んでいたのであろう。住所は南区清水町井池筋で芳瀧が住んでいた鰻谷とは目と鼻の先である。

1896(明治29)年巨泉は画の勉強のため上京した。勉強に出た経緯について、小谷方明氏は「二、三年で年期がすんで、それから巨泉翁はポチ袋の下絵などを書いていたが、大阪では思うように勉強が出来ないと思って上京」したと書いている(81)。しかし何の絵を学びに上京したのかは分からない。その頃の巨泉が画家奥村土牛の回顧談に登場する。

奥村土牛は本名義三、1889(明治22)年2月18日東京の京橋鞆町に生まれた。日本画家、文化勲章受賞者である。土牛の父金次郎は1860(万延元)年名古屋の生まれで16歳で上京し、画家になることを諦めて藍外堂という出版社を経営していた。奥村金次郎は、貧乏でも2階に書生を住ませたのだという。

「父はまた経済に困っているくせに世話好きで、必ず家の二階にだれかを住ませている。ある時は仏師の彫刻家、ある時は画家、という具合である。その画家は、後に川崎巨泉といって玩具の絵を描いて有名になった。私がまだごく小さいときから家にいたので、ときどき私のおもりをしてくれた。なんでも手当たり次第に写生して次々と見せてくれるのであった。のちには大阪に住んで、昭和に入ってから亡くなったが、一度大阪に行った

ら訪ねようと思いつつ、ついに会うことができずに終わった。」(82)

まさに 20 歳の巨泉が蘇る。この回想で重要なのは「なんでも手当たり次第に写生して次々と見せてくれる」という部分である。これを読むと巨泉は芳瀧に入門する以前から写生 = スケッチが好きで、そのころから何でも手当たり次第に写生をしていたのではないかと、それに浮世絵修行の敷き写し、臨模の技術が加わり益々写生力を身につけていったのではないだろうか。そしてこの写生の技術こそおもちゃ絵画家巨泉を生み出した元素だといってもよい。

小さい頃巨泉のスケッチを見たからではないが、日本画家奥村土牛その人もスケッチが大好きだった。スケッチをしているとすべてを忘れる、そのスケッチが重なって制作につながって行くのだと言う。師匠の日本画家梶田半古の画塾では模写がなかったから、自ら模写に励げみ、上野の博物館で 1 日 30 銭で模写をしたこともあったと回想している(83)。浮世絵修行時代の巨泉も奥村土牛と同じようにスケッチに励んだのではないだろうか。

1913(大正 2)年、写生が再び現れる。雑誌『大阪印刷界』に巨泉の下記の文章が掲載された。この時巨泉は 37 歳。図案家として独立し生計を営んでいた時期である。

「私は諸種の応用図案と言う事に付いて少しく研究をして見たいと思って暇さえあれば写生に郊外に出でて自然を友とし、たとひ名も知られない草花でも図案として面白いものがあれば是れを写生し、又自然に配色に面白い取合せがあれば、是れを写して置いて後日の参考にするとすると言う様に研究をして居ります、」(84)

これを書いた 37 歳の巨泉は、ただ早いだけの写生の技術で、幼い奥村土牛を喜ばせた 20 歳の青年画家巨泉ではなく、写生の重要さを強調している図案家としての発言である。こうしてみれば、巨泉は芳瀧の元で修行を積みながら、自らに写生の習得を課し、それがまだ何に役に立つ云々ではなく、ただ只管写生を繰り返す裡に描写力や絵に対する感性が磨かれていった。青年巨泉がやがて図案やおもちゃ絵を創造するための基礎的訓練の一つが写生だったのである。

巨泉にとって写生がどれほど重要だったかを自筆稿本『写生帖』が物語っている。これは 1903(明治 36)年巨泉 26 歳から 1931(昭和 16)年 10 月 65 歳死の約 1 年前まで描き続けられた写生帖である。ここには草花、果物、野菜、魚介、昆虫などが精写されていた。さらに付け加えれば『巨泉玩具帖』『玩具帖』もおもちゃの写生帖なのであっておもちゃ絵作品ではない。巨泉がもっと長命を保ったならば、このおもちゃ絵帖からさらに多くの作品が生み出されたことであろう。

### 3 - 2 . 図案家時代

日清戦争後「諸品に貼るレッテルなどは急にその需要を増し一種の図案業者という型を生んだ、本職の人片間の人等が入混って描いていた、」(85)

日清戦後の広告ブームにプロアマ混在して図案を競い合ったと言う大阪商品陳列所 30年誌の指摘は、福井純子氏が「明治期の京都・大阪の風刺画、風刺雑誌」という講演(86)の中で、大阪の風刺画家にはプロばかりではなく素人作家がいたのが京都との違いであると指摘されたことと奇妙にも符合する。越境するのが大阪人のエネルギーだろうか。

筆者が確認できた巨泉の最も古い図案は 1901(明治 34)年 10 月の『大阪経済雑誌』に掲載された(図 23)のアサヒビールの宣伝である(87)。巨泉 24 歳の作である。巨泉の本格的な図案家としての活動は、大阪商品陳列所の『回顧三十年』の「川崎巨泉氏も同じく自営した、氏はもと矢張木版下を描いていたので明治三十六年頃に創始されたのである。新聞広告引札の図案等は氏独占の有様であった。」を参考にして、“2 - 3 . 版画の制作”で述べたように浮世絵師時代を 1901(明治 34)年ころとしたので、その年あたりから 1916(大正 5)年に玩具会やおもちゃ絵の会などを始めるまでの 15 年間ほどではないかと推定する。この間最初は「本職の人」であり後には次第に二足の草鞋を履く「片間の人」になって、図案家商売から離れて行ったのである。



巨泉の図案(図 23)



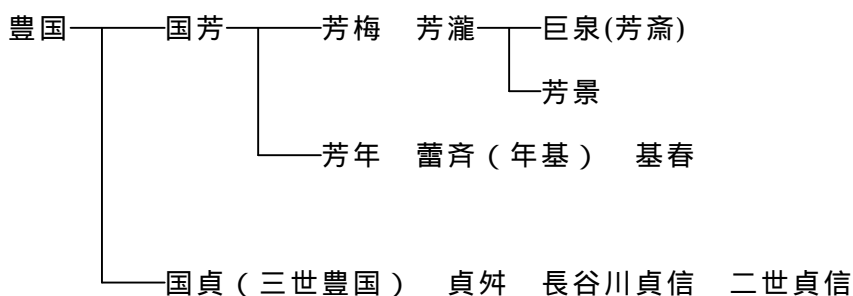
巨泉の図案(図 24)



巨泉の図案(図 25)

岐阜県で最初の「印刷図案かき」になったと自称した矢島周一は、大正時代の大阪の図案界を回顧した「商業美術の今昔 主に関西を中心として」で巨泉に言及し「私が成長してゆく過程で、大阪の図案界で活躍していた人々の歴史にふれるとすれば、初期の石版画（印刷図案・スケッチ）を描いていた人々のなかには鈴木蕾斉（年基）、林基春、二代目長谷川貞信、後藤芳景、川崎巨泉らが有名で」あったと書いた(88)。ここに挙げた5名全員が浮世絵師であるが、大正時代まで存命した人は二代貞信、巨泉は分かっているが、蕾斉（年基）、芳景は没年不祥であり、基春は1858(安政5)年に生まれ1903(明治36)年に没している(89)。

(画系)



矢島が図案の道に足を踏み入れたのが1915(大正4)年頃という。その頃の大阪の図案界を鼓舞した大阪府知事大久保利武の文章がある。曰く、意匠図案は国民の趣味の向上に必要であり「殊に大阪如き商工地として貿易上の覇を称えている大阪人にとりてはこの研究は猶更必要である、然るに通観するに何も東京又は京都に比して幾分劣っているように思う、遺憾のことである、幸に諸君の奮励を希望する次第である。」(90)



巨泉の図案(図26)



巨泉の表紙図案(図27)



巨泉が図案界から去ろうとする頃、大阪府は大阪府図案及工芸品展覧会を 1916(大正 5)年 3 月 15 日から 4 月 14 日まで大阪博物場で開催する。一方『日本印刷界』誌上においては京都高等工芸学校教授武田五一を先生として図案の紙上批評欄があり、武田の厳しい目が容赦なく降り注がれていた。武田図案道場とも言うべきものである。東京、京都に水をあげられた大阪の図案・工芸品界に官民挙げてその興隆を図ろうとしていたことが伺われる。

1917(大正 6)年にもなると、1889(明治 22)年生れで当時は新進画家だった洋画家・鍋井克之が主任の大鐘閣図案所が三休橋に出来、文章、翻訳は 1893(明治 27)年生れの百田宗治が担当すると『日本印刷界』(大正 6 年 6 月号)が報じていて、図案界にも新しい風が吹き始めた感がある。田辺聖子氏の小説『道頓堀の雨に別れて以来なり』(上)に、川柳作家岸本水府が化粧品会社桃谷順天館に文案家として入社したのが 1918(大正 7)年で、その前に新進画家の小田富弥が広告図案係として入社した。それを水府がうらやんで、「図案家とは新しいところへ目をつけたな、と思った。」とあり、まだ本職では食えない新進画家たちの格好の就職先が図案係だったのだろう(91)。因みに水府は巨泉が属した趣味の会・娯美会の一員であった。水府は 1925(大正 14)年 8 月号の『遊覧と名物』誌の“交換と紹介”欄に「福助(土俗人形でも平凡な陶器でも)をあつめています」昔の宣伝ポスターやチラシ類を集め始めていると趣味について書いている(92)。また小田富弥は巨泉の弟子の一人であり、後に挿絵画家として大成した。

小田富弥は 1925(昭和 10)年、平凡社発行の『名作挿画全集』第 1 巻に子母沢寛の弥太郎笠の挿絵を描き、付録『さしゑ』第 1 号のあとがきで「小田富弥先生の御奮闘ぶりは目ざましいもの、御覧の通り枚数も一番多いです。」と紹介され、ここに「猫の欠伸」と題した短文の挿絵論を書いている。この頃には売れっ子の挿絵画家だったことが分かる。

なお巨泉の弟子には、小田富弥の他に、井上麗泉、内田墨泉、和田如泉(儀一)らがいたと小谷方明氏の「川崎巨泉翁の思い出」(93)にある。巨泉が瓶社という名の絵の研究会を始めたと『人魚』1 号に書いたのは 1921(大正 10)年のことであった。近親者と弟子を交えての研究会であったが、その中に小田富弥の名前は見当たらない。井上・山田・和田らがどのような絵を描き活動をしたのか、詳らかに出来る資料を筆者は知らない。

矢島によれば 1915(大正 4)年当時、図案はスケッチと言って石版画工が描くのが常識で、大阪では既に分業化されていたという。明治 20、30 年代の未分業時代から大正初期には石版画工がいたことになる。この辺の東京での事情について喜田川周之氏は、1877(明治 10)

年ころから日清戦争までは、画家自身が石版画工になって描いた砂目石版があった。日清、日露戦争で手引石版印刷機が動力化され新しい職業として石版画の印刷画工が登場したという(94)。これは町の印刷所、図案所内の分業化のことである。貞信、芳景、巨泉らは印刷所には属さず独立して図案を受注したものと考えられる。それにしても大阪の浮世絵師たちは拳って図案界に参入し、新しい体制に順応しようとしていたことがわかる。

### 3 - 3. 図案からおもちゃ絵開眼へ

巨泉は図案家であったが、それはデザインに興味があったことだろう。図案の理論理屈の世界ではないのだ。宣伝効果を追及することでもない。積み重ねた写生から図案を創作する過程が至福の時であればこそ、オリジナリティーを懸命に模索したのである。しかし現実はどうであったか、巨泉が図案化した動植物が役に立ったのか、自分では満足いく図案がそのまま採用されたのか。おそらく巨泉の中に燃えたぎる写生とデザインへの欲求は満たされないまま、幾つのも図案作品が仕事場に放置されたのではないか。

巨泉は玩具を“第二の親”といった。蒐集して置いてあった玩具を手慰みに写生していた巨泉。その玩具が教えてくれたのものとは何か。それは版画の中に人物や風景を描くことでもない、図案によって漫画のような人物などを描くことでもない。玩具を対象としてリアリティーがあって写生とデザインによって描く世界。それこそがおもちゃ絵の世界であった。

巨泉は仕事場の片隅で蒐集した玩具と写生を通して向き合うことによって、描くこととは何か、自分が求めていた絵とは何か、そして描く喜びを教えられたのである。それは絵を仕事とし、生きるために描いてきた絵師・図案家としての自分を手放した瞬間に訪れた未知の幸福感であった。この時巨泉は道楽門の前に立ったのである。

だから画家巨泉にとっても玩具はおもちゃ絵の世界を拓いてくれた生みの母であり、おもちゃ絵画家に育ててくれた第二の親であった。

## 〔4〕巨泉の道楽趣味

### 4 - 1 . 我楽他宗と浪華趣味道楽宗

浪華の玩具趣味人、あるいは趣味人の集団であった浪華趣味「道楽宗」の総本山は巨泉のおもちゃ絵の同好の士・高橋好劇である。総本山梨園山好劇寺の住職東堂然仏が高橋好劇である(95)。『大阪人物辞典』によれば、好劇は1866(明治元)年大阪生まれ。染色業を生業とした趣味人、壮年期から芝居の道具類や郷土玩具の収集に熱をあげたという(96)。開祖は好劇であるが、道楽宗が何時出来たのか。三好米吉が柳屋画廊のカタログ誌『柳屋』で道楽宗を紹介したのが1923(大正12)年、米吉の本尊開眼が1921(大正10)年というからそれ以前には出来ていたことが分かる。その端緒は東京の三田平凡児が創始した趣味集団「我楽他宗」(最初は「我楽多宗」)の成立である。

「我楽他宗」とは何か。近江玩具研究会・藤野滋氏の『我楽他宗宗員列伝』から引こう。

「大正期から昭和戦前期にかけて一世を風靡した我が国最大の趣味家集団。主催者である三田林蔵が大本山第一番札所趣味山平凡児と号し、以下メンバーはそれぞれ山号寺号を持つのをならいとした。主要メンバーを三十三所の札所に擬し、後には盛岡・前橋・京都・奈良・大阪・堺・神戸・大連などに地域支部(別院)も生まれている。」(97)

高橋好劇が始めた浪華趣味道楽宗とは、まさに平凡児の我楽他宗を真似た浪華版我楽他宗なのである。因みに好劇の山号、梨園山とはお察しの通り好劇が大の芝居ファンであった故である。

三田平凡寺については山口昌男氏の『知の自由人たち』の第11回「好事家集団三田平凡児と斎藤昌三」に詳しい。それによれば三田平凡児は本名三田林蔵。1876(明治9)年7月東京の芝車町に材木商の父源二郎の子として生まれた。1909(明治42)年「我楽他宗」を創立し、「自家を「趣味山平凡寺」と号して開山した。開宗のいわれと動機は不明である。」「この「我楽他宗」が、ユニークな人的ネットワークの様相を呈するのは、大正八年(一九一九)に一 人の会員を集め、自らを第一番趣味山平凡児としたうえで、各自に番号と末寺としての寺号をつけて発足してからのことである。その後、四国三十三か所に因んで末寺を三十二寺まで増やし、会費三十三銭の月例会を開いて、趣味品の交換などを行った。」そしてこの「我楽他宗」を「一種の講、連、または連中、仲間といった、今でいえば遊びと学びをごちゃまぜにしたネットワークと見ることができよう。」としている(98)。

藤野氏の前掲書から付け加えるなら、平凡児は5歳の頃の事故が原因となり14歳で聴力を失い学校も休みがちであったが、「絵を小林清親、情歌を鶯亭金升、狂歌を野崎左文、狂

詩を真木痴囊に習い、また、古川柳研究家の飯島花月と親交があるなど、その教養のベ-



スになったのは基本的には江戸の伝統的な趣味的教養とでも言うべきものであった。そのうえに旺盛な読書を通じて得た知識を加えることにより、平凡児独特の価値観が生まれていったのだろう。」という。「我楽他宗」の特徴には、「見立て」「やつし」「言葉遊び」「茶化し」といった趣向があり、「我楽他宗」そのものが「見立て」であり、「平凡児の中にある趣味的教養が趣向という形で現れたとも言えよう。」という。そして「我楽他宗は遊びと教養との間を大きく振幅しながら幅広く人材を吸収し、

『我楽他宗宗員列伝』の表紙(図28) 育て、放出していくことになる。その振幅の破天荒な大きさこそが平凡児の大きさであったのかもしれない。」という(99)。

大阪の趣味人蘆田止水は平凡寺に会った感想を1922(大正11)年11月発行の個人誌『和多久志』第3号「私の知己」(三)趣味山平凡寺氏」と題して書いた。止水は耳が聞こえないからと言われて面食らい、筆談を交えての面談となった。金満家と違い平凡寺の趣味は超然として「或るものを把持している」、それが平凡寺の狂歌“座禅してどう悟って迷っても此の世の中は楽しかりける”に説かれていると感得して、平凡時の不思議世界を羨望するのである。そして平凡寺の趣味は「真に宗教に近い」と言い「画家としても、彫刻篆刻家としても一人前以上の腕のある氏は又連珠、狂句、狂歌、写真術、図案等あらゆるものに秀で」ているのは驚嘆すべきことであり、しかも平凡寺は洒脱で「平民的」で、こまやかに気を使ってくれる人物である。趣味の友というより、「人情の厚い先輩」として知遇を得たことに感謝して、趣味山平凡寺を賛嘆している会見記である。

巨泉も玩具を通じて平凡児と親交があった。1921(大正10)年に平凡児に人魚の絵を所望している。出来上がった絵は人魚が右手にバイオリンを持ち左手で髪の毛を握って水中から上がってくるものだった、巨泉は喜んで表装したが今この絵を見ることは出来ない。

三田平凡児の孫夏目房之介氏は、著書『不肖の孫』(100)で「人生が趣味の人」として平凡児を描いたが、巨泉には「人魚洞の標語」があって、「趣味は人生最大の慰安なり」「玩具趣味は趣味中の安全地帯なり」「趣味なき人は語るに足らず」を掲げた(101)。

明治から大正期にかけて平凡児や巨泉に代表される趣味人たちが、何やかやと寄り集まっては古版本や玩具や納札、絵馬・切手などを対象として様々な趣味の会を作ってはそこで蘊蓄を傾け、蒐集自慢をして遊んだのである。『大阪府立図書館紀要』36号で紹介した

北原直喜氏の講演会のレジュメにあるとおり、<sup>おもちゃかい</sup>面茶会、<sup>ごみかい</sup>娯美会などは数ある趣味の会の中でも代表のような会である。

趣味集団「我楽他宗」のメンバーには有坂与太郎や高橋狗佛もいた。与太郎は第四番与太山玩狐寺、狗佛は第五番玩雪山狗佛寺であった。巨泉のおもちゃ絵に興味を持ち巨泉と交流があったアメリカの人類学者フレデリック・スタール(102)は第三番寿多有山趣味梵刹であったという。スタールは御札博士と呼ばれ外国人とはいえ納札の権威として東京と京阪の趣味人の尊敬を集めていた人物であった。山口氏の前掲書によればスタールはシカゴ大学の人類学博士であったという。

スタールが巨泉に宛てた手紙が『人魚』4号に全文紹介されている。その内容を掻い摘んで紹介すると、日付は1914(大正13)年7月14日付け。3年以前大阪に遊びに行った折、納札会のメンバーから巨泉の「おもちゃ絵集」をもらったが、最近絵集を通覧して巨泉が玩具を深く研究していることに感服した。ついてはアメリカで日本玩具陳列会を計画しているが、蒐集者や蒐集会について知りたい。

1. おもちゃ絵版画会は一定の機関で、会合や玩具の研究などを行っているのか、また年に何回開くのか、会員は何人か。2. 巨泉の写真を送ってほしい。3. おもちゃ絵集にある巨泉考案の夫婦笑い雛、角雛は入手できるか、値段はいくらか。などと事細かく尋ねている。巨泉が協力したのはいうまでもない(103)。

#### 4-2. 巨泉と三好米吉

巨泉のおもちゃ絵を販売していた書店に柳屋書店があった。店主は三好米吉。美術史家熊田司氏によれば、三好米吉は1881(明治14)年神戸生まれ。宮武外骨の滑稽新聞社に入り、『滑稽新聞』の助筆者・編集者として外骨を援けた。筆禍の責を負って獄に繋がれ、出獄後の1910(明治43)年大阪の平野町に「柳屋書店」を開店した(104)。

この店を舞台に米吉はユニークな目録を発行する。それが1913(大正2)年11月に創刊された『美術と文藝』である。1922(大正11)年12月には誌名を『美術と文藝』から『柳屋』に変更し、1943(昭和18)年10月米吉が急逝し『柳屋』も幕を閉じることとなる。

『美術と文藝』、後継誌『柳屋』の性格について、熊田氏の講演会レジュメから紹介しておこう(105)。

『美術と文藝』

大正2年～大正5年

「表紙に富本憲吉・竹久夢二の版画を用い、両者の寄稿を載せるなど、美術文藝同人誌を思わせる。」

大正6年～大正11年

「10号「浮世絵の巻」をはじめ、すべて特集号の体裁をとる。演藝、梅蘭芳、踊、花柳徳次の各巻のように、演藝・舞台藝術への関心が高い。造本に修興を凝らし始める『柳屋』

大正11年～昭和2年

「21号「宣伝の巻」から、道楽宗、川柳、小唄、長唄、蔵票の各巻を出し、近代人の趣味、道楽への関心が高い。奇抜な造本が目立ち、「柳屋の巻」も断続的に刊行。

昭和2年～昭和5年

「33号「大阪の巻」をはじめ、カフェー、万歳、緊縮の各巻など、同時代の風俗や世相への関心が高い。他誌への自筆寄稿文の転載が目立つようになる。

昭和6年～昭和9年

「42号「表現の巻」から、「柳亭の巻」「私の巻」など、柳屋や米吉自身の特集が多く、「私の頁」「二世の頁」の連載もはじまり、個人誌を思わせる。

昭和9年～1943(昭和8)年

「51号「啄木子規の巻」のほか、2度にわたる「啄木の巻」や「子規特輯号」など、文藝資料の紹介がつづく。その他の誌面は、自筆寄稿文を埋め草とすることが多い。」

柳屋書店は美術関係の短冊、書画などを商っていた書店で、大正期玩具を扱っていた店として京阪では知られていて京都の郷土玩具研究家・郷土史家田中緑紅が訪れたほどである。何故米吉が玩具を扱ったのか、熊田司氏は2007(平成19)年2月3日、大阪府立中之島図書館が主催した文化講演会「大阪と出版 - 大阪の出版はユニークですか - 」で「三好米吉とは何者か？」を演題とされ、与謝野晶子あるいは巨泉がいたので玩具を置き始めたのかもしれないとお話しされた。熊田氏の当日のレジュメには、「与謝野晶子の指導で、錦絵や郷土玩具、名家短冊色紙などを置くようになる。」とある。(106)

井上芳子氏は「資料紹介『美術と文芸』・『柳屋』について」(107)で柳屋の取り扱い品は「開店当初は主に古本新本を扱う本屋だったが、機関誌を創刊する頃には文芸美術書や版画、絵封筒、手拭、団扇、地方玩具などを扱うようになっており」と紹介している。機関誌を発行する頃とは1913(大正2)年のことで、その年『美術と文芸』を創刊した。その後

誌名を『柳屋』と変えて、米吉急逝の1943(昭和18)年まで出版された。巨泉との関わりでいえば、巨泉は柳屋書店の開店15周年記念(当時は柳屋画廊)に江戸の浮世絵師奥村政信の短冊色紙売りの嬾絵を模写したポスターを仕上げている。

米吉が浪華趣味道楽宗のメンバーであったことがわかったのは、1923(大正12)年発行の『柳屋』第22号、浪華趣味道楽宗を紹介した「道楽宗の巻」(表紙は巨泉画)のお蔭である。

米吉は浪華趣味道楽宗の第三十一番札所、花紅山柳緑寺という末寺の主であり、ご本尊は「淀君の尊信篤かりし(と想わるゝ)弁才天女の石仏」だと自己紹介している。仲間であった巨泉はというと、第十番札所、碧水山虚僊寺であった。巨泉のご本尊は人魚とおしゃぶり。人魚は不老長寿、おしゃぶりは生まれて親から最初に持たされるありがたい玩具なのでご本尊とした。

「数年前より大阪の好事家仲間の変人凡人諸君が寄り合いて浪華趣味道楽宗三十三所の御寺ゴッコを創め、毎年春秋に無縁狂、施雅喜御恵四季、宝物展覧、本尊出開帳を催し、殊に去年の夏などは三州岡崎より尾州犬山へ布教に順纂するなど創宗の歡喜と道楽の法悦とそゞ現世を楽しみつゝあります。道楽宗三十三所の次に新道楽宗各三十三ヶ寺都合九十九ヶ寺の外に尾張道場として和楽山百牛寺以下九ヶ寺、別院として研学山栄州乃路寺、お札博士寿多有上人を加えて宗門の繁盛趣味の興隆こゝに極まれりと言うべし、です。」

(108)

上記の文中「尾張道場として和楽山百牛寺」とは名古屋の好事家加藤百牛である。百牛は次の“4-4.青賢肇と巨泉”にあるように、青賢肇と交流があった人物で、これは推測であるが百牛は名古屋で吉馬会という、会の名前から絵馬に関係した会なのか、趣味人たちの集まりを主宰していたかもしれない(109)。また研学山栄州乃路寺はお札博士寿多有上人ことフレデリック・スタールである。

#### 4-3. 娯美会について

娯美会について巨泉が「娯美の事ども」として1927(昭和2)年6月発行の『人魚』6号に書いているのでその記事を抜粋してみたい。

「我大阪には無邪気な趣味団体として娯美会なるものがある。既に本年五月を以て第五十四回まで続けられてゐる。自分も其一員として末席を穢すの光榮に浴し毎回出席して諸

君の佳話珍談を拝聴する事をこよなき楽しみとしてゐる、と申上るとなんだか真面目な研究会のようにも思はれるが、実は雲泥の違ひで只訳もなく笑ってしまふ位ひが此会の主意である。還暦の親父もニキビ男も打ち交って互に面白おかしく話すので其処に何とも言へぬ暖かい友情と言ふものが湧いて来るのである。」「会員の一人は言ふ、よくも続いたものだ、其れは其筈である。みんなの意気がピッタリと合つて其処に少しのすきまをも見出さないからだ。金、金、金がなんでそんない<sup>ゝ</sup>有難い金より有難いものは即ち友情である事を忘れてはならない。」

本当に意気の合つた、単なる遊びの会を超えた男たちの無私の友情で結ばれた会であつたことが分かる。巨泉の文章の後に参加したメンバーの寄せ書きがある。達筆でほとんど読めないが判読できる名前を挙げてみる。まず人魚洞、そして小宝、旦水、吉之助、芳本倉多楼、青山一步人などであり、まさに巨泉を支え続けた人たちである。

この娯美会は「旧道楽宗」の一部の人たちが組織した会である。どうやら浪華趣味道楽宗には、「旧道楽宗」「新道楽宗」「第三道楽宗」の3つ会があつて、毎年1回それぞれが独自の趣向を凝らして会合を持っていたらしい。そして娯美会の面々は互いに本名では呼ばず、「堀江のおっさん」「島原のおっさん」「釘ぬき先生」「放送局」とか、変わったところでは「金刷りのアイデアルカラー」などの愛称で呼び合つたという。このような綽名の名付け親は木村旦水で、巨泉の場合は呼びようがなく、奥さんがハマ子だから「ハマの亭主」と呼ばれていた(110)。

浪華趣味道楽宗・娯美会の主要なメンバーと蒐集品を紹介しておこう(111)。

川崎巨泉(末吉) 人魚、濱べにや(屋号「木綿屋」) 絵馬、三好米吉 顔面に関する短冊、三宅吉之助(宇津保文庫主宰) 時代櫛、田中緑紅(俊文) 桃太郎に関する物、太田小宝(健二郎) 福袋と守小判、木戸解剣(忠太郎) 各地達磨起上り、筒井英雄(写真館ワンダス館経営、筒井店で玩具を販売) 外国玩具、木村旦水(助次郎) 名家肉筆達磨絵葉書、梅谷紫翠(秀文・歯科医) 玩具の天神、穠村吐陽(治郎兵衛・針金問屋の若旦那) 各地変形盃、井崎一蝶(亥三郎・風雨屋の一蝶さん・劇画家) 劇人形、粕井豊誠(信一・画家) 伏見人形、青山一步(冬樹・会社員) 社寺及び土産杓子、岸本水府(龍郎・川柳作家) 福助に関する物、三浦おいろ(黒田常太郎) 劇に関する双六、青賢筆(青木賢筆?) 神仏御影、高橋好劇(染物業) 小品玩具と百面相、本田溪花坊(敬之助・川柳作家) 川柳古書画、河本紫香(正次・傘商) 伝説玩具の牛、中西竹山(康雄・食料品商) 各地旅館カード、西田静波(清次郎・棕櫚商) 納札。



娯美会奉祝変装余興の写真（図 29）



写真は『大阪人』2005年2月号より転載

梅谷紫翠	高橋好劇	村松百兔庵	川崎巨泉	藤里好古	福井貫通	三宅吉之助	井崎一蝶	太田虹荷	芳本倉多楼	太田小宝	木下夢人	粕井豊誠	青山一步	田尾九馬公	西田静波	河本紫香	木村旦水	中西竹山	松川美登里
------	------	-------	------	------	------	-------	------	------	-------	------	------	------	------	-------	------	------	------	------	-------

娯美会の他にも大阪の七福会で七福詣りをしたり、河村目呂二が企画した趣味の猫百種（郷土玩具の様々な猫を約6cmに揃えて作る会）に早々に参加するなど、ともかく自発的に或いは誘われて各種の趣味会の仲間・連中になっている。

娯美会はともかく手を代え品を代えして余興を楽しんだり旅行をしたりと大童なのであるが、1928(昭和 3)年の昭和天皇の御大典では千載一遇とばかり「御大典の奉祝踊り」に参加したり、1929(昭和 4)年 1 月 19 日には、四天王寺公園内の小宝に集合、「娯美会奉祝変装余興」(上掲写真)と銘打って集まった連中は、御大典の当日を偲び万歳三唱、騒々しく派手で笑いが巻き起こる。さてその風体はいかなるものであったのか。

写真に納まったのは 20 名。思い思いの衣装を身につけている。伊勢詣り(巨泉)、三番叟、鎧武者、百姓、鹿島の事ふれ、獅々舞、職人、雷の紋々、新芋助、福助、万歳、立雛、神主、紳士、鳥居追い、手古舞、品玉屋などといった塩梅である。(112)

#### 4 - 4 . 青賢肇と巨泉

青賢肇 浪速区嘉美須町三之一三二 これは 1927(昭和 2)年 12 月発行の雑誌『集古』に掲載された青賢肇という名前とその住所である。この会員名簿で大阪だけを拾うと次のような人たちが掲載されている。名前の前に付したのは雅号・職業・屋号などである。生田南水、書林鹿田静七、蝶葉堂佐野英山、岡田伊三四郎、だるまや/旦水木村助次郎、今川一、掬水庵肥田弥一郎、三浦おいろ/黒田常太郎(注記 113 参照)、古物商須藤力松、大藤常次郎、三宅吉之助、橋本清吉、冬樹青山一步、荒木幸太郎、入江軍児、書林中村正兵衛、森繁夫、萍水南木芳太郎、紫香河本正次、柳屋画廊三好米吉、好古藤里喜一郎、緑山平澤勘吉、紫翠梅谷秀文、豊誠粕井、大阪国文社/百兔庵村松茂、虹荷?太田米次郎、竹山中西康雄、書林高尾彦四郎、小宝太田健二郎、松本茂平、山下茂生、川崎巨泉、山川梅仙、静嬾山房原田政一、田中與一郎、静波西田清次郎、友淵楠磨、立齊平野利兵衛、前田長三郎らである。ここに並んだ人たちは当時の大阪でその名を知られた趣味人・好事家であろう。巨泉の名があるし、付け加えれば当時は東京に居てその後大阪に戻る神斧山内金三郎もいた(113)。

青賢肇は巨泉がいた娯美会や集古会にその名があり、京都のちどりやが発行した郷土玩具趣味の雑誌『鳩笛』では新聞の蒐集家として紹介されている。何者が全く分からなかったが、偶々中之島図書館が賢肇の日記『苔瓦堂日録』を所蔵していて、何冊か拾い読みをしている内に巨泉に行き当たったのである。

著者名目録カードでは青木賢肇あおきとしただとなっているが、姓の 1 文字の木を取った「青賢肇」は何と読むのだろう。音読みして「セイ・ケンジョウ」とでも言うのだろうか。さて賢肇の日記『苔瓦堂日録』は 1909(明治 42)年 1 月 1 日から 1921(大正 10)年 12 月 31 日に亘る計

16冊。墨書きの和綴本である。

賢肇とは如何なる人物であったのか。雑誌『集古』の住所が正しければ、賢肇とは青山太治郎である。1878(明治11)年11月13日、現在の名古屋市緑区の生れ。没年不詳。逋信省を経て大阪朝日新聞社調査部に在籍していた時期がある。来日した御札博士フレデリック・スタールを饗応する立場にあったこと、読書も日本の古典籍に親しみ、古瓦や神社の御影を蒐集するなど他の趣味人とは一味違った風があった。また1921(大正10)年当時大谷女学校主催の史学地理学同攻会の大阪談話会に出席、郷土史研究会があつて回を重ねた様子分かるが、これには賢肇を始め田中緑紅、後藤美心、今西茂吉、永見春駒、原田宰慶、青山一步、山村菊雄などが参加した。考古学雑誌を求め、浪花集古会に参加し民俗・風俗・歴史に関心があり古典籍を読み、錦絵に親しむなど古典的教養を身につけた知識人であったと考えられる。大阪府立図書館(現大阪府立中之島図書館)で図書を借覧した記事もある。在籍した大阪朝日新聞社の関係者では、一時大原社会問題研究所に身を寄せた花田大五郎や西村天囚とは親交があつたらしく、天囚から「天囚雜綴十種」の写字代として大島紬一反とお金をもらっている。また大正10年3月には天囚作の漢詩を贈られている。天囚は1919(大正8)年12月大阪朝日を退社し、大正10年3月当時は京都帝国大学の講師であつたかもしれない。天囚の漢詩を以下に記す。

家蔵万卷不為貧 訪購多年大苦辛 他日無妨代末塩 子孫未必讀書人 庚申歲晩作  
碩園彦書

ともかく賢肇の周辺は、地元名古屋の好事家・百牛加藤思成、堀江清足らと交流し、神戸の郷土史家福原会下山人(潜次郎)、京都の郷土研究社・田中緑紅、岡崎の郷土玩具趣味人・稲垣豆人との活発な往信。大正5年頃梅谷秀文(紫翠)とは、紫翠が東京在住時も往信し、本郷3丁目金助町の下宿幸運館を訪ねている。(この頃紫翠22歳、東京帝国大学の学生だったのか?)、名古屋にいた時分の青山一步とも往信している。大正当時横浜にいた斉藤昌三と交流し、斉藤の紹介で三田平凡寺にも面会している。大阪の書店ではだるまや、柳屋、古典籍専門店鹿田松雲堂をよく利用した。製本は南区清水谷の浜本、表装は八幡筋の下間虎僊堂、版画の彫師は瓦町の長谷川広吉、納札の下絵は巨泉。永田有翠からは古典籍を借用し、有翠の死亡記事を大正10年9月27日に知って告別式に参列している。緑紅や南木芳太郎には書籍や写真を貸したり、巨泉から頼まれた誉田神社の赤えいの絵馬を届けたりとこまめに人を訪ねては多くの趣味人との交流を重ねている姿が浮かび上がってくる。また関西納札会を高橋好劇と仕切った人物であつたようにも思える。この項の最初に

集古の会員名を挙げたが、そこに名前のある少なからぬ人たちが賢肇の納札や玩具趣味などの仲間であった。

この日記の面白く且つ貴重なところは何かといえば、大正から昭和時代の知識人であり趣味家であった青木賢肇という人物の行動の記録を通して、大阪・京都・中京・東京の趣味人・好事家との交流や交友の様子を伺い知ることができる点であろう。

ここでは賢肇と巨泉が知り合い、その後交流が深まって行く 1916(大正 5)年から 1918(7年)当たりの日記から交流の様子を紹介する。

1916(大正 5)年辺りから趣味の会の記事が多くなるが、すでに何度か紹介したフレデリック・スタールの記事が 1915(大正 4)年 12 月 8 日にある。その日請招されたスタールは北浜の鶴屋で晚餐をとり賢肇らと記念撮影、翌 9 日賢肇はスタールを前田惇宅に案内し所蔵の藩札などを見せた後、朝日新聞社に戻り千社札や古印、拓本などを進呈し、社所蔵の図書を貸与している。当時スタールをまじかに見た人の証言としてスタールの様子を引用しておく。

「フレデリック、スタール博士は米国市俄古大学人類学教授にして最も日本の風俗を喜び此日の扮装は黒襟縮緬の襦袢に羽二重更紗の下着高貴織の上着を 丸(筆者注:2文字不詳)に星の五ツ紋ある黒羽二重の羽織に博多の帯を締め仙台平の袴を穿ち黒足袋に下駄を履し所一見日本人に異ならず好んで日本料理を食す奇と謂つべし」

また“4-1.巨泉の道楽趣味”で巨泉のおもちゃ絵集を貰ったスタールが 1924(大正 13)年に巨泉に宛てた手紙を紹介したが、実はスタールが 3 年以前に大阪に遊びに行ったというのは、賢肇の『苔瓦堂日録』で確認できる。それは関西納札聯合会主催「スタール博士歓迎納札会」のことで 1921(大正 10)年 4 月 7 日、大阪天満天神の社務所で開かれ出席者約 200 名の盛大な会であった。そのときスタールにおもちゃ絵集を贈呈したことが賢肇の日記で知れる。この歓迎会は、天愚会から三宅吉之助・森田四翠・村松茂(百兔庵)、関西納札会から木村旦水・藤里好古・賢肇、曙会から 2 名の 8 人が集まって準備の協議したことも同年 3 月 5 日の日記にある。そしてこの時スタールと晚餐を共にしたのは、賢肇、木村旦水、南木萍水(芳太郎)、斎藤い調、藤里好古等 13 名であった。

1916(大正 5)年 5 月 14 日、関西納札会発起人会に臨む。寺田花外(岸和田実業新聞)、田中芳哉園(大阪絵入新聞)、前田惇、福山碧翠、友淵楠磨などが集っていた。花外、芳哉園は新聞記者であろう。5 月 14 日の発起人会を受け、1916(大正 5)年 6 月 10 日に関西納札会、場所は堺の開口<sup>あぐち</sup>神社客殿。ここで発会式が行われた。「午後 7 時解散、会する者九十余人、

納札六十余枚を交換す。席上川崎巨泉、猪里漁仙、木崎好尚諸氏の揮毫を請ひ」た。ここで初めて日記の中に巨泉の名前が現れる。この年の3月12、13の両日南堀江で巨泉は初めておもちゃ絵展を開いたが、賢肇はこの展示会を知らなかったのか日記には展示会に行った記事がない。しかし6月10日の関西納札会で巨泉に揮毫を求めたということは巨泉の知名度が高かったことを伺わせるに十分である。

翌1917(大正6)年正月巨泉から賀状が届いた。賢肇は賀状を受けた人たちの姓名を楷書で書き残している。1916(大正5)年の正月には巨泉からの賀状はなかったから賢肇と巨泉は関西納札会の発会式で知り合ったと推測できよう。巨泉の他に賀状が届いたのは蘆田止水、南木芳太郎、永田有翠、べにや、生田南水、木村旦水、永見春駒、高橋好劇、内山不倒、稲垣安郎、肥田溪楓、辻阪翠緑、石田可村、山田新月、三好米吉などである。後には梅谷紫翠、三宅吉之助もこの仲間に加わる。

この1917(大正6)年は巨泉が依頼された納札の版下を届けたり、賢肇が巨泉を訪ねたり、互いにハガキの遣り取りをし、10月には賢肇が巨泉宅を訪れて葡萄を1箱贈る、またその返礼を巨泉がするなど親密な交際が続く。暮れの12月26日巨泉は賢肇を訪れた。「木版玩具絵集第一集」を賢肇に贈呈するためである。『木版玩具絵集第一集』とは賢肇が日記に書いたものでこれは巨泉の最初のおもちゃ絵集『巨泉おもちゃ絵集』であろう。1918(大正7)年1月7日、八幡筋のだるまやで『秦漢瓦当譜』1冊、『風俗研究』11号に巨泉の『おもちゃ絵集』の第1集を購入している。巨泉のおもちゃ絵集を発売と同時に購入しているということになる。大正6年の暮れ巨泉からおもちゃ絵集を寄贈されて、同じものを購入するのも変であるが日記にはそう綴られている。

同年1月15日には巨泉が「おもちゃ絵広告掲載」を依頼している。「おもちゃ絵広告」とは『巨泉おもちゃ絵集』の広告のことであろう。また「玩具絵集」第2集の新刊紹介や「玩具会の規約」を賢肇に依頼している。そして巨泉は『巨泉おもちゃ絵集』を出す毎に賢肇に寄贈した。また個人誌『人魚』もそうである。

このように巨泉は関西納札会での出会いから交際を始め、玩具絵集やおもちゃ絵集の広告や新刊の宣伝文を依頼するなど、新聞人としての賢肇とその筆を頼りにしている様子が分かる。『苔瓦堂日録』をさらに読み解けば、大正時代の今回この稿に登場する人物たちの様子をもっと鮮明に描きだすことが出来よう。今後の課題としたい。

当紀要 36 号の「おもちゃ絵画家・人魚洞主人川崎巨泉の画業とその周辺」の「1-10 巨泉を支えた同好の志というネットワーク」で紹介した溪楓であるが、巨泉は溪楓の個人誌『あのな』のカボチャの表紙絵を描いたが、『あのな』1916(大正 15)年 1 月号には「あのなの始」という記事があり、そこに賛助会員として巨泉の名前があり、他に渡辺霞亭、渡辺虹衣、木村旦水、相野青牛の名前が見える。

個人誌『あのな』は 1914(大正 13)年 2 月 11 日創刊、1930(昭和 5)年 6 月 11 日発行の第



78 号で終刊となった。発行は無論私費であり、友人・知己には無償で呈送し、合本用の表紙・題簽も申し込んだ人には無料で贈呈したという(114)。大正 15 年 1 月号掲載の「あのなの始」と毎号巻末に掲げられた「ひとり言」から『あのな』を発行の経緯紹介してみよう。

溪楓は売れない雑誌、買手のない雑誌を作ろうとし、会の名前を「壮哉小会」「そうやさかい」と決め、霞亭が宣伝文のようなものを『あのな』の表紙(図 30)書いてその題が「あのなア」であった。それがそのまま雑誌のタイトルとなった。壮哉小会は、「談笑娯楽の間に歴史、風俗、古実等の研究」をし、機関誌として『あのな』を発行する。また特別会員に限って月 1 回以上の集会を持ち、普通会员は月二十銭を支払う。「入会、退会、帰宅等は其都度住所、姓名、雅号、趣味等を明瞭に記載通報すべし。」とあり、「ひとり言」には「あのなは掬水庵の随筆である。書き記すことは凡て自己本位。」など記し、発行日は溪楓の誕生日が二月十一日なので毎月十一日としたいなどと洒落ている。橋爪節也氏は『あのな』を「芯の通ったよき趣味人、大阪ベル・エポックの洒脱な知識人らしいエスプリを感じさせる。」とされた(115)。「あのな」には巨泉の短文や来信が掲載され、娯美会、面茶会や遊びに興じる道楽宗の記事も結構掲載されている。

肥田溪楓(1877(明治 10)年 2 月 11 日生~1948 年(昭和 23)年 9 月 30 日歿)という希代の趣味人にして実業家の人物像を『あのな』から引用しておきたい。この元記事は 1915(大正 14)年 10 月発行の『大阪財界人物史』大阪国政協会編という断り書きがある。

「虎屋信託株式会社 取締役 肥田弥一郎氏

大阪の財界に蟠居して、一勢力をなし虎屋銀行を經營して個人銀行間に推重せられたるものは南大阪の金豪肥田弥兵衛氏なりき、氏は古き家系を有する大阪長者として財界一方の雄たりしと共に哲学趣味に造詣浅からざりしを以て実業界窄に見るの人格者として知られたりしが大正二年六十歳を以て長逝せり。

当主弥一郎氏は其長子にして、明治十年二月十一日を以て生れ、大正二年四月家督を相続す。肥田家一門の宗家にして居を南区久左衛門町に置き、夙に一族を以て株式会社虎屋銀行を設立しその経営に任じ斯界の信望甚だ厚かりしが、大正四年同銀行を山口銀行に併合したる以来、別に虎屋信託株式会社を起し、爾来主としてこれが経営に当り居れり、蓋し本邦に於ける信託事業が欧米先進国に比して未だ甚だ幼域にありて其将来頗る多望の余地を存する点に着眼し、現時大阪に於ける這種の事業中山口系の関西信託、岸本系の摂津信託、而して肥田系の虎屋信託三雁行の觀を呈するを見ば蓋し思半ばに過ぎん。

氏は亦先代の衣鉢を享けて文学の趣味深く、自ら掬水庵溪楓と号し図書館を設けて普く百家の珍書を蔵す、(中略)世に珍書古籍を貯蔵するの人決して乏しからず、而も多くは自個の趣味欲を満足せしむるに止まり其開放を厭ふの風あり、否面倒がるの傾向あり、然るに氏は然らず、同好者の来りて閲覽を乞ふものあれば欣然として之を迎へ何物が参考に資することあれば無上の愉樂となす、眞の蔵書家として克く書を解するの士なり。

資性温厚、殊に先代の伝統を受けて博愛仁慈の志厚く、其居南地花街に近接して昼夜管弦の音穠境に逼るあるも怙として顧みず、世の富豪子弟に見るが如き折花攀柳の事は氏に於いて之を聞かず、洵に富豪紳士中の異彩なり。」(「焼直しの記事」『あのな』大正15年5月号)

#### 4-6. 巨泉と落語

巨泉は日清戦後の1894,95(明治27、8)年ころから1912(明治45)年の間法善寺の落語席へ「只絵筆に親しみながら其の肩のこりを癒さんがために」よく通った(116)。上方落語史によればこの時期は桂派と三友派の名人上手がその覇権を競った上方落語界の最高潮の時期、黄金時代だった(117)。浪花三友派の二代桂米団次、笑福亭福松の“大文字屋踊り”があり、桂派では二代桂文三、桂万光、二代三遊亭円馬の五人廻し、大兵肥満の盲人西国坊明学の琵琶、盃に客をのせて踊る大力坊、石井ブラックなる西洋人、色物では宝集家金之助という別嬪さんがいたと回想している(118)。二代目桂三木助。当時は“おもちゃ”と呼ばれていたが、巨泉は前座で出る“おもちゃ”の話を楽しんだ。その後上方落語界は分派分裂を繰り返し、吉本花月派に収斂して行く。

巨泉と落語との永いお付き合いを考えれば、五代目笑福亭松鶴が主催した松鶴会の会員になったのも当然のことかもしれない。松鶴会の会誌『上方はなし』に熱心に寄稿し1936(昭和11)年4月から1937(昭和12)年3月の間の寄稿家番付で横綱になっている。昭

和 12 年 3 月の松鶴会の会員には巨泉の畏友たち村松百兎庵、梅谷紫翠、三宅吉之助、三好米吉、また丸尾長頭、俳優月形龍之介、林長二郎、歌舞伎の中村扇雀の名前がある。

例えばおもちゃ十二支会は 1928(昭和 3)年の春にできたが、大阪の落語家林家染丸、橘屋蔵之助、三遊亭円若、円馬、志ん蔵、桂小春団治、三宅吉之助、梅谷紫翠、井崎一蝶、芳本倉多楼、粕井豊誠、巨泉など 12 名の会であった。会ができたきっかけは、ある日手先の器用な志ん蔵が洗濯挟で獅子を作り始め、我も我もと落語家連中が作り出し、それに巨泉等が加わって成立。12 人に因んで大きさは 2 寸までで干支のおもちゃを作ろうということになったというもの。毎月幹事が作るおもちゃを指定、皆趣向を凝らした作品を持ち寄ってワイワイ失敗談やら苦心談に花を咲かせ楽しく遊んだのである(119)。

林家染丸、三遊亭円馬、円若、円馬、志ん蔵等落語家が参加したもう一つの会に自作・他作の宝船の絵を自宅等で配り合う「浪華宝船会」があり、皆それを楽しみに仲間の家を巡り歩くのである。無論巨泉も仲間であった。第 1 回の浪華宝船会目録には浮世絵師長谷川小信や森田乙三洞、蘆田止水に賢肇等に加え川崎巴水女(巨泉の妻ハマ子)も入った総勢 48 名であった。

真面目人間だった巨泉だけに趣味の会では肩の力を抜き大いに楽しんだことであろう。

## 〔5〕巨泉忌の客たち

今回の展示会の図録にも掲載した巨泉の一周忌を紹介した梅谷紫翠が「綱車」70 号に書いた文章をここでも紹介しておきたい。

“大阪の巨泉忌” 梅谷紫翠 「故川崎巨泉氏の一周忌追悼会が、九月十二日、天王寺区生玉隆専寺(さくらの寺)で挙行された。待合の座敷には故人を偲ぶ軸、色紙、自作玩具、印譜、扇面等が展覧される。本堂にて厳かな法要後、発起人を代表して木戸忠太郎氏の挨拶あり、つづいて面茶会同人の奉仕により、手向の落語あり、同人の林家染丸、橘屋蔵之助、三遊亭しん蔵の諸氏と、三遊亭円馬氏病気のため、門人三遊亭小円馬氏及び染丸門人林家染語楼氏の出演にて一層花を添える。閉会后座談会を行う。来会者五十余名。中には近頃逢う機会も少なかった太田虹荷、青賢肇、鹿島伝蔵、南木萍水、穠村吐陽、山内神斧、森田乙三洞、岸本彩星、笑福亭松鶴、花柳芳兵衛(昔顔の小春団治)氏等のも見受けた。地下の巨泉氏もさだめし満足していただけることと思う。」(120)盛大な一周忌の法要であったことが分かる。この参加者で名前が挙がった岸本彩星は岸本五兵衛のこと。郷土玩具蒐集家として著名で彩星童人と称した。玩具の蒐集館を「子<sup>ね</sup>寿<sup>ず</sup>里<sup>り</sup>庫<sup>こ</sup>」と命名した。



“ねずりこ”は“おしゃぶり”のことで巨泉が浪華趣味道楽宗でご本尊にしたものでもあった(121)。山内神斧は巨泉のおもちゃ絵の販売に協力した人であった。本名金三郎。1886(明治 19)年大阪で生れ。東京に出て梶田半古に入門し、東京美術学校を卒業後、1911(明治 44)年大阪に戻り美術工芸品販売店「吾八」を開業。1941(昭和 16)年阪急百貨店美術部内で「梅田書房」を始める。梅田書房の販売目録に『これくしょん』がある。1966(昭和 41)年 81 歳で没した(122)。森田乙三洞は<モリタ オッサンドウ>と読む。乙三洞について橋爪節也、中尾靖、荒木基次の 3 氏によって創刊された大阪心齋橋の出版文化を考える同人誌『心齋橋本撰』の第 3 号が乙三洞を特集している。以下の乙三洞の解説は第 3 号所収の橋爪節也氏著「これは他人ごとではない - 愛しの乙三洞、森田櫛菊さんに聞く - 」が出典である(123)。

森田乙三洞は本名政信。1895(明治 28)年奈良県に生まれた。1914(大正 3)年大阪楽天地で乙三洞書店を始める。取り扱ったのは本、郷土玩具、民俗的な人形などで趣味の店であ



った。乙三洞という奇妙な名の由来は東京でオッサン、オッサンと呼ばれたことによるという。乙三洞の顧客は中井浩水、木村旦水、梅谷紫翠、岸本五兵衛たちであった。乙三洞と巨泉の接点を探せば浪華宝船会になる。宝船会で乙三洞は見事な自画自刻自摺の宝船の版画を展覧会に出品している。乙三洞特集で肥田皓三氏は小学生のころ乙三洞でポッペンを買ってもらったという思い出を綴っている。

乙三洞は戦後岸本五兵衛の援助により南区安堂寺橋通りで店『心齋橋本撰』3 号(図 31) を始める。その後 1951(昭和 26)年鰻谷に店を移転するが、1959(昭和 34)年 64 歳で没した。

先の紫翠の文章に木村旦水の名前がない。旦水に触れたいので敢えて名前を挙げる。高見澤たか子氏の著書『ある浮世絵師の遺産 - 高見澤遠治おぼえ書 - 』に「浮世絵版画複製の天才」高見澤遠治を大阪の錦絵問屋だるま屋の木村某が関東大震災後に大阪に呼び複製を作らせていたが、だるま屋は約束を破りそれを 3 枚売り払ってしまったというのである(124)。詳しくは本書を読んでいただきたいが、これだけを読むといかがわしい大阪の商売人と受け取られかねない。旦水の名誉のために敢えていえば、旦水は縷々述べたように巨泉のおもちゃ絵の同好の士として巨泉を援けた 1 人であり、大阪の郷土趣味誌『難波津』を発行、また古書を販売するなど出版・書店人であり、また趣味人としても著名であった。

どうか守銭奴旦水と決め付けないでいただきたい。

#### [6]雑誌『鯛車』の巨泉追悼号

1942(昭和17)年11月1日発行の『鯛車』59号は「故巨泉氏追悼號」である。顔ぶれは、有坂與太郎、木戸忠太郎、川口榮三、瀬川俊峰、梅林新市、青山一歩入、芳本倉太郎、平岩富士蔵、梅谷紫翠、立花壽、小山彰、田中野狐禅、田畑豊太郎、井上麗泉である。巨泉を知るために彼等の印象に残る言葉を選んで紹介してみたい(125)。

與太郎の言葉:「巨泉先生 先生は単なる趣味人でなかった点と斯界を大きくリードして居られた点とは、彼我誰一人否定するものがありません。先生が長逝されたことは啻に大阪ばかりの損失でなく、汎玩界の大きな打撃であることは、私から申上げるまでもありませんが、幸ひに玩界は恙うした未曾有の超非常時の中にあっても決して衰へを見せて居りません。これは偏に先生が御生前に遺して下さった足跡と気魄の賜物だと云ふことを、私は肝に銘じて忘れません。どうぞ御冥福をお祈りいたします。」(「巨泉先生逝く」)

達磨収集家として著名な忠太郎は巨泉との出会いを書いている。「川崎氏に初めてお目にかかったのは大正十一年の秋で、丁度三十年の長いお附合ひだった。新築の住宅の襖に所蔵の起上り達磨を写生して戴いたのを手始めに、民族玩具、ことに達磨に関する同氏の作品は私の書棚に溢るゝばかりである。(「川崎氏を追慕して」)

榮三の言葉:「玩具に終始せられた翁、そして、玩具界に余りにも偉大な足跡をのこして白玉楼中の人となられた翁、昭和の晴風、昭和の寒月に比して来た自分には、ありとある玩具趣味の輩が、一体となって、翁のために、玩具葬でも行って御冥福を祈ってあげたい様な気がする。」(「玩具葬を催せ」)

俊峰の言葉:「浪華民玩界の長老として年を超越した厚情を享け、この間画よりは民玩の研究と蒐集に教えを受け啓発せらるゝことも少なからず、(中略)いつお伺いしても心持よく御語を承るが、不思議にも絵絹を伸べて居らるゝのを見たことがない。聞けば御仕事は朝飯前後迄とのこと、言葉は少々悪いが、朝の気分で運筆鋭く、巧みに民玩の特徴を生かして描かれた。」(「爬龍船の思ひ出」)

新市の言葉:「玩具絵界では、笛畝、武雄、巨泉の三氏に先ず指を屈す可きだが三者それぞれ特徴があり、何れを第一人者と呼ぶ可きではないと思ふ。が、専門的に玩具絵に親しまれたのは巨泉さんであろう。私刊の画集、雑誌、その一つ玩

具人として座右に備ふ可きものばかりである。」(「巨泉氏を偲ぶ」)

一步人の言葉：「川崎さんは故清水晴風さん時代の民玩愛好者であり、民玩界の開拓者であるから、お命日を記念して巨泉忌として永久に数々の功績を偲び。年中行事としてお世話したいと思ふて居ります。」(「嗚呼巨泉先生」)

倉太郎の言葉：「一寸したことで非常に気にせらるゝ先生のことを知って居るので、見舞はなかった。しかし心残りのことであった。面茶会の集まりをして居った頃は必ず月に二回や三回は会ったし、其折のことはその「面茶」の誌面に残っている。」(「<sup>おともらふ</sup>串の記」)

富士蔵の言葉：「愛蔵の絵馬一つ。それには里芋を並べた様な土鈴が描かれてみて、右側に例の威勢よき「巨泉」の落款が躍動してゐる。無論本格的な小絵馬ではなく、嘗ての土鈴全盛期頃、玩具絵として画かれた趣味品であろうか。之を入手したのが染井の鉄拐堂付近であった事は、数年の歳月を経てこゝに川崎巨泉さんの訃報に接し、感今更深きものがある。」(「絵馬に偲ぶ」)

紫翠の言葉：「平素から慈父の如く慕ふてゐただ(筆者注：原文の“だ”はゝに濁り点)けに私達おもちゃ党にとってはまことに悲しみの極である。(中略)「なあー先生」これは大阪に於て私等仲間が巨泉先生を呼ぶ時の言葉で(中略)先生と言へば川崎先生と決っていた。」先生が天下茶屋に引越された時が面白い。お弟子の人々が犬張子やら大獅子頭、大蘇民将来などを担いでゆかれたので近所の人は何かと思ったに違ひない。さすがにおもちゃ絵の巨泉先生の引越しである。先生の思ひ出はなかなか尽きない。」(「人魚洞引越し」)

壽の言葉：「誠に品の好い御隠居さんと云ふ感じで、恰も肉親の者でも迎へた如く、いかにも懐かしげに嬉しげに親しみ深くいろいろと話して下すったその印象は、終生忘れ得ないところである。」(「あゝ巨星隕つ」)

彰の言葉：「私は遂に巨泉氏とは面接の機会なく、また文通のなくありし日の巨泉氏とは縁甚だうすく残念に思ふばかりである。きくところによれば、巨泉氏は温厚にして篤実、長者の風格を備へられたといふことであるが、令室また温順にして貞淑であるといふ。ただこの好配偶の間に子宝が恵まれなかったことは御気の毒にたえない。」(「民玩界の大損失」)

野狐禅の言葉：「巨泉さんは芝居絵の大家芳瀧さんの愛婿で関西に於ける玩具絵の巨匠である。否専門的な上から言へば日本的の玩具絵師である。日本的玩具絵として

日本一なら無論世界第一人者とも言へやうと思ふ。」「巨泉さんの画風は大衆的で玩具の特質を自由に取扱い筆力も雄健に勝れてゐると思ふ。(「巨泉さんを惜しむ」)

豊太郎の言葉：「昨年、巨泉氏が或玩具紙に人魚洞こけし苦言と云ふのを書かれてゐたのを一読して非常に敬服させられて了った。(中略)今迄色々こけしの記事を読んだがこけしに対するこれ程立派な正論は初めてだった。(「巨泉氏とこけし」)

麗泉の言葉：「先生は明治初期浮世絵の大家として知られた中井芳瀧先生に師事せられ、応用画に筆を執られた時代には其意匠考案の卓越せる特に斯界に重きをなして居られました。大正元年改元と共に、翻然装飾画に転ぜらるゝと俱に元来愛好蒐集の民族玩具研究に興味を深め、爾来その歿せらるゝまで全生命をこれに打ち込まれたと申しても過言ではないでせう。」「(「門人として」)

## [7]趣味人たちのゆとりと笑い

巨泉を含めた、蘆田止水、肥田溪楓、藤里好古、木村旦水、みな思い思いに凝った個人誌を発行した。売るという目的ではなくて、自分の思いや知的好奇心の対象、趣味や家族のことを自由に書くこと。旦水は別として巨泉、止水、溪楓、好古はそれを友人知人に送呈する読者限定。読む読まない、保存するしないも勝手に結構という姿勢であった。

巨泉は『人魚』、止水は『和多久志』、溪楓は『あのな』、好古は『星稜叢書』を発行し、旦水は『なにはづ』を出版した。旦水の『なにはづ』は和紙和装の立派な大阪郷土研究雑誌で値段は50銭、1924(大正13)年2月に創刊した。

巨泉、止水、溪楓等の個人誌は謂わば友人達への手紙代わりであるが、好古の『星叢書』は手紙代わりというより個人研究誌であった。例えばその第1集は『おこし米攻』で好古の言葉に従えば「栗起こしの起源沿革を叙し、看板に「梅鉢」紋を使用する由縁、等々、文化史的研究」ということになる(126)。

巨泉達趣味人の遊びの一つが個人誌の発行だったといえ、旦水から文句がでそうである。旦水の『なにはづ』は20号で休刊となったが、旦水にいわせればネタ切れでも売れなくなったからでもない、編集人船橋政一郎の時間的余裕がなくなったことによるのだという。余裕がつけば「永久に刊行を続けてゆくつもり」だったというのが本心であるといい、売るとはいえ売れなくても結構、損失は折込済みであり、それより大阪で生まれ育った人間として、大阪に貢献したいという気持ちで始めたのであって、これぞ書肆として商売冥

利だといいい切っている(127)。

ところで浪花道楽宗のメンバーだった萍水南木芳太郎は1930(昭和5)年「上方郷土研究会」を創立して機関誌『上方』を発行した。筒井之隆氏は『なにわ町人学者伝』で萍水を評して、「芳太郎の「上方」刊行に賭けた意地は、「こりすぎ」といわれながら最後まで続けた表紙の錦絵版画に貫かれた」(128)とされたが、筆者は萍水の『上方』に先鞭をつけたのは、旦水の『なにはづ』全20号ではないかと考えている。

旦水も萍水も共に生まれ育った大阪をこよなく愛するが故に、旦水は「時代錯誤」と萍水は「こりすぎ」といわれても揺るがず一徹に仕事をしたのであろう。

さてこの2人に共通の熱っぽさは、巨泉、止水、溪楓、好古にも共通し、それは仕事ばかりではなく遊び付き合いも熱っぽかった。それも趣味の遊びである。大正の中期から昭和初期にかけて巨泉達の行動を見ていると、本当に羨ましいかぎりである。

巨泉や賢肇の日常行動を観察すると、ゆとりと笑いがあることが分かる。その日常を拾い上げてみよう。

巨泉の場合、まず、趣味を持つこと。趣味の仲間を持つこと。趣味の仲間達で遊びを考えだして理屈抜きでそれを楽しむこと。当時は仮装が流行ったが、仮装に進んで参加すること。仲間と通信し情報を交換すること。個人誌を発行し、そこで人生を語り、趣味を語り、たまには蘊蓄をたれること。自分の考えを機会があればどしどし発表すること。絵を書いたり、おもちゃを作ったり、仲間と小旅行を楽しむこと。寄席に行って大いに笑うこと。くよくよしないこと。夫婦2人の趣味の共通性。金より仲間・家族が大事。

サラリーマン賢肇の場合は、仕事は早めに終わらせること。そして趣味の仲間のところへ出かけること。本を貸したり借りたりすることもよい。趣味の交換会や史談会には積極的に参加すること。講演会、展示会にも出かけてみる。新世界に行って活動写真・歌舞伎を観たり、夕食を摂ったりお風呂に入ること。友人のためには労を惜しまないこと。小まめに手紙を書くこと。大切な本は自分で筆写して保存すること。夜の時間を大切に使うこと。趣味の収集には常に全力を傾けること。歩くことを苦にしないこと。遠来の友には仲間と宴を持つこと。

自分が住む都市(マチ)に仲間を沢山作ること。仕事はほどほどにして時間にゆとりを持って仲間と楽しむ時間を作りだすこと。そしてホットな気持ちでこれに参加することである。これは巨泉、止水、溪楓、好古、賢肇に共通であり、ゆとりと笑いの源泉であるようだ。

## 〔8〕巨泉という人

巨泉は何か追い払うかのように陰の世界を避け、明るい光の下に自分と絵を置こうとした作家ではなかったろうか。師芳瀧の芝居絵や錦絵新聞の世界からも最も遠くに行こうとした画家であったろう。

巨泉の師芳瀧は来客があれば何時までも酒を片手に談笑する人だったという。しかし絵筆をとれば行くところ可ならざるはなし、芝居絵・芝居番付・名所図会・引き札・挿絵、そして図案にしてもその秀抜な才能はアサヒビールのラベルデザインを生み出している。巨泉は師芳瀧の広範な画業に及ぶことは無く、師の後影を踏みつつ歩んだが、玩具の絵という特異な分野を切り拓き、おもちゃ絵を作品化し独自のスタイル画に育て上げ才能を開花させた。師芳瀧が生前その絵を見たら「なんや、おもしろいもんが商売になるんやな」と言ったかもしれない。

これは巨泉の資質であろうが、巨泉は表と裏、建前と本音などの使い分けが出来なかった人ではないか。人物を描くよりも植物や動物を描くことが好きなタイプであり、人間関係に煩わされることを嫌い、凝性で1つのことに没入するような人。巨泉はゴンタな玩具愛好家たちの悪ふざけを、静かに笑って見ているような人であったように思える。

巨泉が通ったのは寄席であった。島之内に住んだ巨泉には道頓堀の芝居小屋が間近にあった。それでも歌舞伎や浄瑠璃を好んで観たということがなかったようだ。行くなら落語。1人になって気楽に笑える落語が好きであった。複雑な筋を追ったりすることも嫌だし、歌舞伎・浄瑠璃は大声で笑えるようなものではない。

巨泉は悲しいにつけ嬉しいにつけ玩具をスケッチしたのではないだろうか。そのスケッチを見るとすべてを忘れる。自分が書いた玩具 = おもちゃ絵が自分に語りかけてくるような、そして自分を慰めてくれるような。それがおもちゃ絵だったのではないか。

石川啄木に『悲しき玩具』という歌集がある。その中に次のような歌がある。

“『石川はふびんな奴だ。』ときにかう自分で言ひて、かなしみてみる ”

啄木は自分の哀しさを詠んで自己悲哀を味わうのである。読めばまた哀しくなる。でも巨泉の玩具はどうだろう。悲しい時に描いても玩具は悲しい顔ひとつしていない。そこにあって見るたびに巨泉を晴れやかな気持ちにさせてくれる。終生子どもがなかった巨泉の子どもはおもちゃ絵に描いた玩具たちであった。

巨泉は、玩具は所蔵しても蒐集した玩具を惜しげもなく手放すことができた。何故かと

言えば、玩具をおもちゃ絵に転化し、描写し終わったあとに残った玩具はもう魂の抜け殻でしかないからである。玩具の魂は巨泉の描いたおもちゃ絵の中で永遠の生命を得たからである。だから棄てるには忍びないと言いながら玩具を人に分け、自分が最後まで持ち続けたのは僅かな玩具であった。

小谷方明氏が悲しい実話を紹介している。1945(昭和20)年3月の大阪大空襲で巨泉宅は焼け落ち、小谷氏が焼け跡を訪れると巨泉所蔵の玩具が1つ、巨泉宅の目印として置いてあったという。また戦後ハマ子未亡人を訪ねると巨泉のおもちゃ画譜の版木を薪にして燃やしていたので炭と交換して版画を頂いたという(129)。

当館が寄贈を受けたのは人魚洞文庫一式であった。寄贈に際し図書以外の物を受入れたかどうか分からないが、もし巨泉所蔵の玩具も受け入れていたら、京都府立総合資料館に脳健之助氏が寄贈した“脳コレクション”(130)のように、あるいは今に伝わったかもしれないと、残念に思うこと頻りであった。

さて巨泉は50歳を期して再生を誓った。そこで語ったのは何かと言えば、子がない寂しさよりも、子や孫に残す金の心配もない、またそんな財産もない、貞淑な妻がいて気楽に筆を取れる幸せな境遇に感謝し、「再生の自分は、本職の為に、新しい研究を続け、尚新らしき交際をもとめ、何十年、何百年、何千年命のあらん限り、諸兄とともに面白く愉快地に日をおくりたいと其れのみを望んでいる。」(131)という巨泉の大桃源郷であった。

巨泉という人は器用に世間を渡って歩くような人ではないし、リーダーや指導者には勧められてもなるような人ではない。その生き方も無骨に生真面目なところと小心なところのある人だったのではないか。巨泉の全貌はまだまだ見えてこない。これを契機として更に巨泉の著述探しやおもちゃ絵の内容また玩具研究家としての巨泉についても調査する必要を感じている。

なお最後になりましたが、筆者中之島図書館在職中の平成19年度中之島図書館主催「これがおもちゃ絵だ！」展開催に際し、彦根市立図書館、国宝・彦根城築城400年祭実行委員会、郷土玩具文化研究会の皆様には大変お世話になりました。また大阪市近代美術館準備室研究主幹熊田司氏からは雑誌柳屋の資料提供を受け、近江玩具研究会の藤野滋氏には雑誌『鯛車』や我楽他宗・平凡児についてご教示頂きました。「これがおもちゃ絵だ！」展担当者の大阪資料・古典籍室高野如子司書には巨泉の雑誌記事についてご教示いただきました。記して感謝いたします。

< 参考資料 >

これは 1933(昭和 18)年 9 月『川崎巨泉画伯遺墨 人魚洞文庫絵本展覧会目録』大阪府立図書館編刊掲載の巨泉の著作解説に一部個人誌『人魚』からの解説も付け加えたものである。寸法は当時のままとした。なお中之島図書館が所蔵するものは、所蔵有とし、請求記号を付した。

『おもちゃ百種』大正末期の作 絹本二尺 一軸、巨泉絶筆「俵牛」一面 二枚折屏風 縦三尺、横一尺五寸(伏見玩具の俵牛の図、雄渾なる筆勢にして遂に絶筆となりしもの) 所蔵：有、請求記号：919-4

「人魚洞文庫」索引三冊共 百十六冊 自筆本 『巨泉玩具帖』及『玩具帖』より成る。前書は大正八年至昭和七年執筆、後書は昭和六年一月より同十七年頃までの執筆にかゝる。

『巨泉玩具帖』書帖仕立 第一集至第六集 計六十冊 第一集縦八寸二分横六寸 第二集至六集縦九寸一分横六寸四分 所蔵：有、請求記号：甲和 41(貴重書)

『玩具帖』日本綴 第一冊至第五十二冊 計五十二冊 縦八寸横六寸六分 「索引」巨泉玩具帖三冊 玩具帖一冊 計四冊 寸法不同、 所蔵：有、請求記号：甲和 41(貴重書)

『写生帖』自筆稿本 (玩具以外の主として草花、果物、野菜、魚介、昆虫等の写生なり。明治三十六年より昭和十六年十月に至る間、随時精写されしものなり。) 所蔵：無

『おもちゃ国絵巻』自筆本 一卷 大正丙寅春日巨泉題 郷土玩具の姿態そのまゝを配置して構図を作りしもの五枚を以て一卷とす。別に構図解題の一卷(未装幀)を添ふ。縦一尺一寸二分、一枚四尺四、五寸の唐紙五枚を用ふ。 所蔵：無

『起上小法師画集』大正十三年六月第一集初刊 同十四年五月第十二集完成 生漉奉書横二つ切 縦一尺二寸横八寸二分 達磨堂主人木戸忠太郎氏珍藏の起上小法師を描きしもの、第一集より第十二集に至る三十六枚総数二百五十九種を収む。一集三枚木戸氏の解説一枚を添え頒布せしもの画帖仕立一帖に合輯す。当初の形態は袋入り毎月三枚宛発行した。

所蔵：有 請求記号：に 1 - 213

『起上小法師画集摺刷順序帖』一帖 書帖仕立 縦一尺二寸横八寸 刊本起上小法師画集の内第五図及び第十九図二葉の刷工程の順序を示したるものにて、第五図は二十二度刷、第十九図は二十度刷なり。 所蔵：無

『起上小法師写生帖』自筆草稿本 縦七寸六分横一尺二寸二分 達磨堂架蔵の起上小法師を画伯の写生せしものにて刊本「起上小法師画集」の草稿なり。第一号大正十三年五月頃



より随時写生を始め十四年四月に終る。『京都土手町夷川上ル木戸氏邸にて写生起上り小法師画集画稿』との識語あり。第二号は紀年不明、第三号は昭和二年後写生、第四号は同九年、第五号は同十三年六月の写生にかゝる。第三、四、五号には「起上小法師写生追加」と題名あり、即ち画集後編の原稿にして未刊行なり。第一号三十六枚七十二図、第二号三十五枚六十九図、第三号三十五枚七十九図、第四号十五枚三十三図、第五号十一枚二十三図 所蔵：無

『起上小法師画集』後編 一帖 自筆稿本 縦一尺二寸横八寸 刊本起上小法師画集の後編にして、同写生帖の第三号以下の成品六十二図を収む。画伯自装になる画帖仕立なり。木戸氏の左の緒言あり。「大正十三四年の交、川崎巨泉画伯に依頼せし達磨堂蔵品の写生画三十六枚を木板摺となしそれぞれ解説を添へ起上小法師画集と題して発行し頒布せしが、其後新品の蒐集せらるるに従ひ、取捨選択引きつづき同画伯の揮毫を煩はせしもの己に六十枚を超えたり、然るに時宛も日支事変酣にして物資の欠乏甚しく、之が板行の如きは到底実現し得ざる閑事となりしが、さりとしてその儘放置するにも忍びず、敢て一帙の画帖に装し起上小法師画集後編と名つけて、聊か画伯の勞に酬ゆと云爾 昭和十五年春 木戸忠太郎」 所蔵：有 請求記号：に1-213

『図案小品集』横本三冊 自家版 縦六寸四分横八寸四部 巨泉画伯のいまだおもちゃ絵を描かざる以前の作品にしてカット集なり。(各冊共二十葉を収む。)第一集 明治四十四年十一月刊 第二集 明治四十五年三月刊 第三集 大正元年十月刊 所蔵：有 請求記号：948-47

『巨泉おもちゃ絵集』解説共 五帖 自家版 縦一尺六寸横七寸九分 (土俗玩具と縁起物とを取扱ふ。大正七年第一集を刊行し同八年八月第二十集にて完結。) 解説帖 序文 渡邊虹衣、自第一集至第五集帖 (題簽・淡島寒月 題画題句・巖谷小波 附：伝説的地方玩具と縁起物) 自第六集至第十集帖 (題簽・水落露石 附：各地玩具と縁起もの) 自第十一集至第十五集帖 (題簽・巖谷小波 附：諸国土俗図) 自第十六集至第二十集帖 (題簽・中井浩水 附：地方縁起物) 所蔵：無

『おもちゃ十二支』一帖 大正七年十二月だるまや書店刊 縦九寸三分横七寸 (十二支に因む動物玩具をそれぞれ十二面に描く。一面十二乃至十五種を収む。) 所蔵：無

『おもちゃ千種』十冊 自筆本 縦一尺二寸七分横八寸五分 (一集三十枚宛、第一集より第十集に至る。同好者二十人を限定月十五枚宛頒布二十ヶ月にて完成す。別漉大形奉書を二折となし片面に執筆す。自序及自跋を書す。) 自序 「世界のあらん限り人類の死滅せ

ざる限り人間と密接の關係を持って居るものは玩具である洋の東西を問はず貴賤の別なく一度母体より離るゝが最後其れの玩具に抛って歡樂を得ると云ふ事に变りはないされば玩具は人間を作る第二の親である。我国伝来の土俗玩具も時の推移には適し難く近時模バタ臭き模倣品のため漸時其跡を絶つ事になったのは我等日本人として誠に残念な事である、余今おもちゃ千種の名たるものを描きて聊か第二の親のために謝恩となす。大正庚申冬於浪花鰻谷碧水居 筆者 巨泉 印 自跋 本画集は土俗玩具縁起もの絵馬等を主として描写せしものなり尚漏れたるもの多しされど千種に満ちたればひとまず茲に筆を擱く事とせり 大正壬戌仲秋 碧水居主識 印 』所蔵：無

『**巨泉漫筆 おもちゃ箱**』二帖 大正十三年一月刊 縦七寸横九寸五分 「巨泉漫画おもちゃ箱」頒布会刊行 (各地の玩具縁起物百図を収め解説を附す。) 所蔵：有 請求記号：949 - 8

『**同稿本**』二帖 縦八寸横一尺五分 (右刊本の稿本なり。) 所蔵：無

『**おもちゃ十二月**』一帖 大正十五年一月着筆同六月完成 縦九寸三分横七寸一分 だるまや書店刊行 (御守と縁起物を正月より十二月までそれぞれの月行事に因みて十二面に描く。一面十二乃至十六個の玩具を収む。) 所蔵：有、請求記号：759.9 - 46N

『**郷土の光**』自家版 二十一帖 大正十五年九月刊第一集 昭和三年五月完結 第二十集 縦七寸八部 横五寸三分 (郷土玩具を主とし縁起物は絵馬御守等の信仰的土俗をも総括す。もと一集十枚を袋入となす。総描くところの玩具二百余种に上る。他に索引一冊を附す。)寸法縦六寸五分、横三寸二分、生漉奉書使用、木版色刷、是と同寸法の地模様入りの奉書に解説、活字、凸版小図挿入、木版色刷小図貼付。毎集、木版色刷十枚、解説十枚、目次一枚、仮袋入、二十袋、(第一集より第二十集完結)。石州半紙四ツ折、木版色摺表紙、二十四頁のいろは索引と国別索引とを載せた、郷土の光索引を添付しました。会費四十円。所蔵：無

『**玩具会**』横帖一冊 絵納札二十枚 縦六寸六分横二寸二分 (昭和四年五月、田中亀文、上野信雄(雨枝野)連盟主催にて浪速玩具絵納札会を天王寺公園小宝亭に催す。その際画伯の描きし会員の納札二十枚を一面三枚宛貼附せしもの。「浪華のおもちゃ」と題する解説を附す。) 所蔵：無

『**土俗紋様集**』一帙十枚 昭和六年五月刊 縦七寸三分横九寸四部 だるまや書店刊 (土俗玩具に描れたる紋様を図案化せしもの、一画一面十枚と解説を附し紙帙入一組となす。) 所蔵：無

『おもちゃ画譜』自家版 大和綴 十帖 昭和七年九月第一集初刊同十年十月第十集完結  
縦八寸横五寸五分 (半紙本和装十集十帖。各帖五図の彩色口絵を入れ、本文石州半紙を  
用ひて六十数個の玩具縁起物其他を揮毫、詳細なる解説を附す。)所蔵：有 請求記号：949

- 6

『おもちゃ博覧会』一帖 昭和十二年一月刊 縦九寸四分横七寸三分 だるまや書店発行  
(内容を集古館、動物園、水族館、諸禽舎及び土鈴館に分ち、それぞれ二十乃至二十四、  
五の玩具画を収む。)所蔵：無

『芳瀧画集』一冊 自家版 川崎巨泉編発行 昭和六年 所蔵：有 請求記号：914-49

『人魚』七冊 自家版 川崎巨泉編発行 大正十年～昭和三年

巨泉の個人誌。当館所蔵は第一号から七号の七冊であるが、終刊については不詳。

< 参考資料 >

大阪府立図書館発行の『川崎巨泉画伯遺墨 人魚洞文庫絵本展覧会目録』(昭和 18 年 9  
月 12 日発行)から、当時の館長長田富作の「序文」、巻末掲載の「川崎巨泉画伯略伝」を  
掲載する。



二種の『川崎巨泉画伯遺墨 人魚洞文庫絵  
本展覧会目録』(中之島図書館蔵)

\* 内容は同一

長田富作の「序文」

「昨年九月人魚洞主人川崎巨泉画伯逝去せらるるや、その遺族、画伯畢生の玩具写生帖、  
人魚洞文庫百十二冊外に索引四冊を添へ挙げて本館に寄贈せらる。画伯はもと浮世絵師歌  
川芳瀧の門に出づ、夙くより郷土玩具に興味を有し、その蒐集と調査との力を致す。描く  
ところの古玩郷玩千種に及ぶ、即ち、「おもちゃ画家」として明治末期より大正、昭和の三  
代に亘り、特異の存在たりしは、斯界の熟知するところ、敢て贅言を要せず。今や拳国大

東亜建設に奮闘しつゝあるの時、本邦固有の古玩、郷玩を通じて、聊か日本民族精神の把握と、尚武の民風作興との資する所あらんとし、茲に、「人魚洞文庫絵本展覧会」を開催す。敵々故人の周忌に際会し、画伯遺墨の情切なるものあり、乃ち諸家に請ひ、画伯の遺墨、遺愛の玩具等を恩借し、併せて一堂に展覧し、汎く遺芳を伝えんとす。目録成るに当り出陳賛同の各位に深甚の謝意を表すると共に一言述べて序となす。

昭和癸未年九月 大阪府立図書館長 長田富作 』

#### 川崎巨泉画伯略伝

「川崎巨泉、名は末吉、巨泉はその号なり。又芳齋、碧水居人、人魚洞等の別号あり。川崎源平の三男。明治四十年六月二日堺市神明町に生る。少にして画を好む。明治二十五年の頃同市甲斐町居住中井芳瀧の門に入る。居ること数年、同二十九年出で上京し、明年帰阪す。偶々師匠芳瀧その居を移して大阪南区鰻谷にあり、巨泉乃ち鰻谷宅に寓し、翌三十一年芳瀧の女ハマ子を娶る。

当初は主として新聞広告下絵、刷物画、其他風俗画などを描く。明治三十六、七年の交より各地郷土玩具に興味を有し、就中古玩を愛好す。その漸く湮滅せんとするを惜しみ、蒐集と写生とに維れ努め、遂に「おもちゃ画家」として大成せらる。

揮毫するところ自筆画帖に、「人魚洞文庫」絵本、「写生帖」「おもちゃ国絵巻」「巨泉漫筆おもちゃ箱」「起上小法師画集後篇」「おもちゃ千種」等あり、又自家版に「凶案商品集」「巨泉おもちゃ絵集」「巨泉漫筆おもちゃ箱」「郷土の光」「おもちゃ画譜」等、だるまや書店版に「おもちゃ十二支」「おもちゃ十二月」「土俗文様集」「おもちゃ博覧会」、木戸氏版に「起上小法師画集」等あり。

元来多趣多芸の人、輕妙なる文章をよくし、俳諧川柳にも秀ず。惟に郷土玩具が単なる趣味を脱して、社会的に深き根拠を有する民族芸術としての価値を認められ、所謂おもちゃ界をして今日の隆盛を齎せしめしもの、全く画伯の賜と謂つべし、昭和十七年不幸病魔の襲ふところとなり、九月十五日と云ふに大阪市住吉区（新区名阿倍野区）天王寺町の寓居に歿す。享年六十六歳。」（大阪歌川派略系は本分の系図と重なるので省略した。）

#### 注記

原文の引用で、歴史的かな使いはそのままとし、漢字は新漢字とした。

図 18 笹木芳瀧画「車夫が追剥逮捕に活躍」『大阪錦画新聞』1号（中之島図書館蔵）、図 19 芳瀧筆の引札（中之島図書館蔵）、図 20 巨泉筆『大阪名所』（中之島図書館蔵）、図 21 巨泉筆『大阪名所十六景』

(中之島図書館蔵) 図 22 巨泉筆の引札・明治 30 年頃(中之島図書館蔵) 図 23 アサヒビールの宣伝  
『大阪経済雑誌』明治 35 年 5 月 5 日掲載(中之島図書館蔵) 図 24 『大阪経済雑誌』明治 34 年 10 月  
15 日掲載(中之島図書館蔵) 図 25 『大阪経済雑誌』明治 35 年 6 月 15 日掲載(中之島図書館蔵) 図  
26 『大阪印刷界』大正 2 年 2 月 10 日掲載(中之島図書館蔵) 図 27 『大阪印刷界』大正 2 年 9 月 10 日  
の表紙(中之島図書館蔵) 図 28 『我楽他宗宗員列伝』の表紙(個人蔵) 図 29 娯美会奉祝変装余興の  
写真(古川武志「旦那衆の粹なる遊び。」『大阪人』第 59 巻・2 月号 (財)大阪都市協会 平成 17 年 2  
月 1 日より転載)、図 30 『あのかな』大正 15 年 1 月号の表紙(中之島図書館蔵) 図 31 『心齋橋本撰』第  
参号「心齋橋研究」同人・橋爪紳也・中尾務・荒木基次 2007 年 1 月(個人蔵)

(74) 『浪華摘英』浪華摘英編纂事務所編 三島聡恵発行 1915(大正 4)年

(75) 川崎巨泉「中井芳瀧」『郷土研究上方』1939(昭和 14)年 8 月号。川崎巨泉「中井芳瀧の方影」『郷  
土研究上方』1942(昭和 17)年 6 月号

(76) 由良哲次『総校浮世絵類考』画文堂 1979(昭和 54)年「1089 中井芳瀧〔故法室〕俗称恒次  
郎といふ。大坂の人。父を源兵衛と云ふ。画を中島芳梅に学びたり。現住京都市下京区高宮町。〔三浦  
本〕浪花の人なり、彼地の俳優似顔絵多く画きたり、当時浪花にては国貞三代目豊国の門人広信、芳雪  
等と共に行われし人なりし。芳梅門人芳瀧とは別人なり、此芳瀧は弘化前後の人なり。芳梅の門人芳瀧  
は天保十二年の生れなれば時代相違あるを見るべし。」なお凡例によれば「故法室本」は鈴木南陵旧蔵、  
「三浦本」は「無名翁本、溪斎英泉『無名翁随意』天保四年(1833)写」に三浦若海増補(天理図書館蔵)  
とある。

(77) 川崎巨泉「アサヒビールと情歌」『郷土研究上方』1925(昭和 10)年

(78) 鳥居駒吉と宅徳平については『Asahi 100』アサヒビール株式会社社史資料室編 アサヒビール  
株式会社 1990(平成 2)年。平瀬露香と北村柳也については加納露彦「『よしこの』に就いて」『上方は  
なし』1936(昭和 11)年 第 8 集による。

(79) 『大阪市商工業者資産録』明治 28 年 10 月調 商業興信所 1896(明治 29)年

(80) 「中井徳次郎氏を訪う」『大阪印刷界』大正 2 年 6 月号 大阪印刷界社 1913(大正 2)年

(81) 小谷方明「川崎巨泉翁の思い出」『郷土玩具界の先覚 川崎巨泉翁を偲ぶ』川崎巨泉翁供養会編発  
行 村田書店製作 1979(昭和 54)年

(82) 『私の履歴書 文化人 7』日本経済新聞社 1984(昭和 59)年

(83) 奥村土牛、鈴木進、藤本韶三 鼎談「描くこと見ること」『三彩』305 号 三彩社 1973(昭和 48)  
年

(84) 「模範図案(其一)小春日和」の図案が掲載された囲み記事。

(85) 『回顧三十年』大阪商品陳列所創立三十周年記念協賛会 1920(大正9)年

(86) 福井純子(立命館大学非常勤講師)「明治期の京都・大阪の風刺画、風刺雑誌」『明治大阪の錦絵新聞』関連企画諷刺画講座VOL6 第1回 2006年11月18日(土)於:伊丹市立美術館

(87) 『大阪経済雑誌』1901(明治34)年10月 大阪経済社

(88) 矢島周一「商業美術の今昔・主に関西を中心として」『日本デザイン小史』ダヴィッド社 1970

(89) 「林基春、安政5年生まれ、大阪天満綿利太物問屋支配人小林小兵衛の男。捨藏。明治11年大阪の人鈴木蓄斎に入門。明治14年ころ東京に行った。三代目柳亭種彦の世話になり、数年後に帰阪、再びらいさいの門に入り、北斎、河鍋暁斎の画風を研究。」明治36年9月6日没す。(『此花』 凋落号 明治45年7月15日) 「鈴木年基〔渡辺本〕画系・芳年門人 作画期・明治 大阪の人、俗称雷之助、雷斎(後に蓄斎と改む)と号す。明治十年版「文武高名伝」数図、及び「大日本名所写真」と題する風景画(中判二丁がけ)数図を画けり、画風清親を模倣せしものゝ如し。大阪安堂寺橋通三丁目二十三番地に住す。」後藤芳景〔渡辺本〕画系・芳瀧門人 作画期・明治 大阪の人、東京に住す、俗称徳次郎、豊斎と号す。」(由良哲次『総校浮世絵類考』)「1411 二代長谷川貞信〔渡辺本〕生・嘉永元年十月 画系・初代貞信の長男 作画期・明治 大阪の人、長谷川氏、俗称徳太郎、画を父に学び初め小信といひしが、明治九年父の隠居後貞信(二代)と改む、役者似顔絵をよくし、大阪にて江戸風の芝居絵番附を興せり、明治四十三年春、長男(二代小信)に家督をゆずりて隠居す。」(由良哲次『総校浮世絵類考』)「嘉永元年10月18日生まれ、昭和15年6月21日に長逝、享年93。」「因に翁の葬儀は六月二十三日天王寺六万體町天鷲寺に於て盛大なる告別式があり、本会より供花一对を贈った(南木生)」「長谷川貞信翁逝く」『上方』115号 上方郷土研究会 1940年(昭和15)7月)

後藤芳景(徳次郎)は1922(大正11)年に65歳で没したと巨泉の『芳瀧画集』にある。逆算すると1857(安政4)年の生まれである。従って暫定的ではあるが、後藤芳景の生没年は1857(安政4)年~1922(大正11)年としておく。

(90) 大久保利武「意匠図案の撰択は刻下の急務なり」『日本印刷界』1916(大正5)年4月号

(91) 田辺聖子『道頓堀の雨に別れて以来なり - 川柳作家・岸本水府とその時代 - 』上巻 中央公論社 1998

(92) 「交換と紹介」欄『遊覧と名物』8月号 大阪名物及特産社 1925(大正14)年

(93) 小谷方明氏の「川崎巨泉翁の思い出」『郷土玩具界の先覚 川崎巨泉翁を偲ぶ』川崎巨泉翁供養会 製作村田書店 1979(昭和54)年

(94) 喜田川周之「石版画工」『太陽』 98所収 1971(昭和46)年 平凡社

(95) 「お江戸の趣味者を出し抜いた高橋好劇氏」頑愚庵主 『趣味と名物』1925(大正14)年5月号

(96) 「高橋好劇」の項。『大阪人物辞典』清文堂 2000(平成 12)年

(97) 藤野滋 『我楽他宗宗員列伝』私家版 近江玩具研究会藤野滋 2007(平成 19)年

(98) 山口昌男 『NHK 人間大学「知の自由人たち—近代日本・市井のアカデミー—発掘 - 」』日本放送協会  
1997(平成 9)年

(99) 藤野滋 『我楽他宗宗員列伝』私家版 近江玩具研究会藤野滋 2007(平成 19)年

(100) 夏目房之助 『不肖の孫』筑摩書房 1996(平成 8)年

三田平凡児の孫漫画家夏目房之介は、我楽他宗の名前の謂われは「我も他もともに楽しむところから我楽他宗と名付け、どんな階層の者でも受入れる宗旨だったらしい。」と言う。

(101) 『人魚』2号 1922(大正 11)年

(102) 「御札博士の絵馬観」(上)(下)藤野好古 『難波津』2、3号 1924(大正 13)年 3、4月 p 1  
2 - 13 ここにはスタールが「EMA」なるパンフレットに書いた一文が掲載されている。藤野好古は大阪  
天満宮教学部主事であった人、青賢肇とは昵懇であった。

フレデリック・スタールについて、藤野滋 『我楽他宗宗員列伝』から引用する。「1858年9月2日米  
国ニューヨーク州生、昭和8年8月14日東京市にて没。第三十一番札所多有山趣味寺。お札博士。米  
国イリノイ州シカゴ市在住。絵馬、納札、迷信に関する一切。」

(103) 川崎巨泉「亜米利加より」『人魚』4号 1925(大正 14)年

(104) 熊田司「三好米吉と「柳屋」のことなど—平野町時代を中心に—」『たまや』第3号 2006年  
なお米吉について、熊田司講演会「三好米吉とは何者か? ~ 雑誌「柳屋」と近代の大阪出版界を考える  
~」レジュメから経歴を補足しておく。米吉は1881(明治 14)年12月15日神戸生まれ。幼少年期は  
父の郷里広島県三原で過ごす。1901(明治 34)年、宮武外骨の『滑稽新聞』の社員となる。“何尾幽蘭”  
などのペンネームで記事を書く。後『滑稽新聞』『絵葉書世界』の編集発行人となる。『滑稽新聞』は1908  
(明治 41)年終刊となる。1912(明治 45)年1月、『美術新報』に柳屋の広告を出す、1913(大正 2)  
年11月、佐竹草迷宮(守一郎、香取仙之助)の協力で目録『美術と文藝』を創刊する。

(105) 熊田司 演題「三好米吉とは何者か? ~ 雑誌「柳屋」と近代の大阪出版界を考える ~」レジュメ  
2007(平成 19)年2月3日

(106) 2007(平成 19)年2月3日(土)に開催した文化講演会「大阪と出版 - 大阪の出版はユニークで  
すか? -」。講師：林哲夫。演題「雑誌“辻馬車”と波屋書房の周辺 - 大阪出版史の一齣 -」、講師：熊  
田司。演題「三好米吉とは何者か? ~ 雑誌「柳屋」と近代の大阪出版界を考える ~」

(107) 井上芳子(和歌山県立近代美術館学芸員)「資料紹介『美術と文芸』・『柳屋』について」『大阪に  
おける近代商業デザインの調査研究』平成 17年3月 平成 15~16年文部科学省研究費補助金研究(C)

(1) 研究成果報告書 研究代表者 宮島久雄(国立近代美術館)

(108) 引用 の文章に続き「道楽宗々意」が掲げている。以下はその全文。

「如是我聞本宗は他力自力の本願にて誰人も信仰の勝手自由にして人を茶にし偽りを言はず無欲限りなくして克く人の笑を受け朝夕は看経勤行も入らず自分勝手の熱を吐き日の永きも忘れ夜の更くるも不知るが道楽宗の妙諦なれば各札所霊場を巡りて線香の代りに煙草を燻べお茶でも呑んで住職に接し御利益を受けられましよう。詠歌 おしなべて高き低きも道伴で 趣味の巷に遊ぶたのしみ」

『柳屋』22号

(109) 『苔瓦堂日録』1918(大正7)年1月11日

(110) 川崎巨泉「浪華の娯美会と土俗会」『鳩笛』6号 ちどりや 1925(大正14)年8月終刊

(111) 川崎巨泉「蒐集趣味展覧会」『鳩笛』6号 ちどりや 1925(大正14)年8月終刊

なお、ここでメンバーの本名や職業については、一部北原直喜氏が「これがおもちゃ絵だ！」関連講演会で使用された村松百兎庵遺品資料に負うところがある。

(112) 碧松園鈍痴「師走の万歳」『あのみ』1929(昭和4)年2月号

(113) 「会員名簿」『集古』集古会 1927(昭和2)年 一部雅名を補記した。

三浦おいろ = 黒田常太郎について『あのみ』1929(昭和4)年1月号から全文引用する。

「三浦おいろ翁 本名黒田常太郎、文久三癸亥六月十五日京都先斗町竹村屋に生る。父の井上藤三郎は島原の大井楼主にして俳名を兎尺後に千草堂草志と云った。翁は祇園新地富永町三浦屋を相続す、明治十年京都室町松原の早野篠之助方で発行せし西京新聞社の給仕となる、同十五年同人と共に我楽多珍報を発行す、同二十年東上して都新聞に入社す、同二十三年名古屋日報に転じ編集中二十四年十月二十八日に於ける濃尾大地震の爲め社運傾き退社す、若宮末広座に於ける震災義捐芝居が仲立となり劇場に出入りし同二十九年大須宝生座にて中村伝五郎(故人)が養子中村小伝治(故人)披露に際し初めて作者となり太夫元服部茂三郎の一座に加はり雅号おいろ(蝶鳥舎三都子)と称して幕内に出勤せるが最初なり、同三十一年二月御園座新築竣成の初開場より『梨園と風雅四季の花』と題せる雑誌に同座上演狂言の筋書を発行し、同座及び末広座、千歳座等に東京大阪より名優の乗込に際し座付作者として従事す、同四十一年十月成駒屋(中村鴈治郎)に招聘され松竹に籍を置き現在に至った。趣味は古新聞記事古切手及び古番付等を蒐集し、雅事の俳句は千種堂嫦娥、狂歌は敷島道成、情歌は紅の家恋師と号し、みやひ会を設置し専ら風雅を嗜好とす。過去の追憶の歌は = 面影をけふとうつしてかへり花なにはの梅と咲も嬉しき = 後の月名残となりし今年かな。十月三日午前九時十分大腸加答兒にて死去享年六十七、自宅(南区鍛冶屋町二八地)に於て午後二時より三時まで真宗告別式を行ふ。法名釈常恭。

(114) 肥田皓三氏から筆者への手紙に記載されていた。なお溪楓の生没年も肥田氏の手紙に記されている



た。

(115) 橋爪節也「肥田溪楓」『彷徨月刊』彷徨社 2006(平成 18)年 5 月号

(116) 川崎巨泉「思い出すことゝも」竹内梅之助編『上方はなし』18 集 楽語荘 1927(昭和 12)年

(117) 前田勇『改訂増補上方落語の歴史』杉本書店 1966(昭和 41)年

(118) 川崎巨泉「思い出すことゝも」竹内梅之助編『上方はなし』18 集 楽語荘 1927(昭和 12)年

(119) 川崎巨泉「自作おもちゃ十二支会」『にんぎょ』7 号 1928(昭和 3)年 「おもちゃ箱」『あのな』昭和 3 年 11 月号

(120) 梅谷紫翠「大阪の巨泉忌」『鯛車』 1944(昭和 19)年

(121) 伊達俊光「岸本氏の子寿里庫」『大大阪の文化』金尾文淵堂 1942(昭和 17)年

(122) 肥田皓三「山内金三郎書簡」(上)『館報池田文庫』第 26 号 財団法人阪急池田文庫 2005(平成 17)年

(123) 『心斎橋本撰』については、朝日新聞大阪版、2006(平成 18)年 8 月 31 日に「大阪の出版文化復権



を」と題して記事に取り上げられた。“本好きの 3 人、季刊誌創刊、心斎橋筋の書物・書店紹介”の文字が大きく書かれている。その記事の後半の一部を以下に引用する。「江戸期の大坂は井原西鶴と近松門左衛門の出現で空前の出版ブームが到来、秋田屋と河内屋という二大グループが出版界をリード、その影響は昭和に入って戦前まで続いた、という。荒木さんは編集後記で「今、大阪の出版文化は絶滅危惧種状態。東京への情報一極集中が原因とされているが、大阪人も大阪の本を買わない。そんなご時世に『<sup>とうろう</sup> <sup>まの</sup>蟬の斧』として発刊した。読者の『大阪心』に響けば幸いである」と記した。橋爪さんは「全集の付録の月

上の写真は“おっさん洞”を特集した『心斎橋本撰』第 4 号 2007.7.4 発行(個人蔵)

報みたいな小冊子だが、継続して出すことが大事だ。『才走る苾菜の本』を菜箸でつかみ、歯ごたえのある内容に調理したい」と創刊の心意気は高い。「個人や仲間で編集出版する出版文化関係の小冊子は、今はなかなか出ない。お金がかかるだろうし、ブログという世界があるからそちらにいつてしまう。それでも敢えて冊子という形で『心斎橋本撰』を出版するという 3 人の心意気にエールを送りたい。

(124) 高見澤たか子『ある浮世絵師の遺産 - 高見澤遠治おぼえ書 - 』東京書籍 1978(昭和 53)年

(125) 有坂與太郎編『鯛車』59 号 日本民族玩具協会 1942(昭和 17)年 11 月

(126) 『星稜叢書』には実費 50 銭とあるが、友人には無料配布したのではなかろうか。第 2 号「天満宮崇敬と潜伏吉利支丹」茶道と吉利支丹、千利休の死因、禁教、弾圧、天満天神との習合等画期的文献。

1930(昭和5)年12月25日発行。第3号「川柳水無月袂」川柳を基本とする水無月袂の文化、史的研究。平易に袂褌の意義を論述す。1931(昭和6)年6月25日発行。第4号「南方海嶋に於ける近畿流竄者を語る、著者月余に渉り伊豆七島を巡航、古文献を発見、五畿内出身、流竄者の動静を叙す。1932(昭和7)年12月20日発行。第5号「芭蕉天神々影の検討」1933(昭和8)年2月25日発行。第6号「鎮花祭放」1933(昭和8)年9月1日発行。第7号「今雄社の検討」1934(昭和9)年8月25日発行。第8号「神仏分離時代の大阪の神社」1940(昭和15)年5月25日発行。以下が発行を予定していた。第9号「北野曼荼羅攻」、第10号「伊豆大島三原山御神火崇敬史」。なお第1号から第8号までは大阪府立中之島図書館、大阪資料・古典籍課が所蔵している。

(127) 木村助次郎「発行者として」『なにはづ』第20号 1925(大正14)年10月10日

(128) 筒井之隆「南木芳太郎」『なにわ町人学者伝』谷沢永一編 潮出版社 1983(昭和58)年

(129) 小谷方明「おもちゃ画譜を出された頃」『おもちゃ画譜』村田書店 1979()

(130) 胙コレクションは、「京都在住の胙健之助氏が、昭和初期から半世紀をかけて収集した日本各地と東アジア、東南アジアを中心とする諸外国の人形や玩具など約12,000点の資料です。」(京都府立総合資料館 現物資料“胙コレクション”の説明 <http://www.pref.kyoto.jp/shiryokan/genbutu.html>)

(131) 川崎巨泉「再生の日に」『人魚』6号 1927(昭和2)年